武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

【Ｎコード】

Ｎ１１９５Ｚ

【作者名】

月影

【あらすじ】

友との再会、神姫との出会い、学園での生活。そして、戦い――

これは一人の少年とそのパートナーたる神姫、そして彼を取り巻く人々が織り成す、神姫と共に生きる町と呼ばれる場所で紡いぐ物語

※武装神姫の二次創作です。ＰＳＰバトルマスターズ２を元に書き

ますが、ゲームの内容が内容なので細かいストーリーはほぼオリジナルです。話のネタが思いつき次第、執筆・投稿という形をとるので更新は不定期となります。また原作に出てくるキャラも何人か出てきますが、キャラの性格において、読者の皆さんのイメージとの多少の相違が出てくるかもしれませんがご了承下さい

第1話『神姫と共に生きる町』（前書き）

この物語はフィクションです。団体、地域名は架空のものとなります。

第1話『神姫と共に生きる町』

西暦２０３６年。第三次世界大戦もなく、宇宙人の襲来も無かった、現代から繋がる当たり前の未来。その世界ではロボットが当たり前の様に存在し、様々な世界で活躍していた。

神姫、それは全長１５ｃｍのフィギュアロボ、“心と感情”を持ち、最も人々の近くにいる存在。多彩な道具・機構に換装し、オーナーを補佐するパートナー。

その神姫に人々は思い思いの武装を装備させ戦わせた。名誉の為、強さの証明の為、あるいはただ勝利の為に

オーナーに従い、武装し戦いに赴く彼女らを人々は『武装神姫』と呼ぶ

まず目に飛び込んでくるのは神姫をつれて歩くたくさんの人々。神姫センターでは毎日の様に公式バトルが行われ、参加者と観客で大賑わいだ。更に魚屋を覗いてみれば猫型神姫のマオチャオが頭に捻り鉢巻を巻いて店主と一緒に店番をしていたり、公園で行われているストリートライブに耳を傾ければギター型神姫ベイビーラズがマスターと一緒にギターを弾き鳴らしている。学校では生徒と一緒に神姫が当たり前の様に授業に参加しており、それどころか勉強を教える教師の傍らにも教師を補佐するかの様に神姫が居る。その場所に一歩足を踏み入れれば神姫を見かけない事など無い、と言うぐらいここは至る処に神姫が存在している。何時しか人々はこの場所

をこう呼んでいた“神姫と共に生きる町、神妃(かみひ)市”と

まだ雪が降り積もる１２月、神妃市立神妃学院高等部。物語はここから始まる――

第２話『再会と始まりは粉雪が降り積もる場所で』

少年は緊張の面持ちで待っていた。茶髪のミドルヘアーにほんの少しだけ鋭い目つきをした少年が厚めのフード付きのコートに身を包み、その手に一枚の紙を持ってじっとその時を待っている。少年だけではない、周りに自分と同じ様にその時を待つ少年少女で溢れ返っている。少年と同じ様に緊張の面持ちをした者も居れば、自分は大丈夫だと自信に満ちた者も居り、それとは逆に不安一杯なのか目を強く瞑り手を組んで祈ってる者も居る。そんな中遂にその時はやってきた。係りの人が少年少女たちの前に立ててあるボードに一枚の大きな紙を貼り付ける。そこにはたくさんの番号が順番に書かれており、時より飛んでいる番号もある。皆が目を凝らして自分の番号を探し始め、やがてある者は歓喜に包まれ、またある者は落胆に沈む。

そしてこの少年も同じ様に数字を探す自分の番号は０１２４。が、０１２２の次に表示されていたのは０１２５。自分の数字は存在しない。けれど少年は他の人と同じ様に落胆には沈まない。逆に少しホッとする、何故ならこの用紙に自分の番号が載っていようものなら負けなのだ。やがて、係りの人が空いているスペースに一枚目の半分しかないサイズの用紙を張り出し、少年はそちらに目を向ける。そこには僅か１０個の番号しか載っておらず、番号の並ぶ順番もバラバラだ

「０１２４、０１２４――」

緊張の余り、口に出しながらその番号を探す少年、やがて――

「……あった」

上から5番目に表示されている１２４の番号、もう一度見比べてみるが間違いない

「ーーーっし！」

感極まった表情で思わずガッツポーズをした。自分は勝ったのだと、両親との勝負に、目的は達せられた。と、同時にホッとしたのか体から力が抜け思わずフゥーっと息を吐いてしまった。

「よっしゃあぁーーーー！！！」

と、何処からとも無く響いてくる一際大きな歓声

「やったぜ！　たま子、合格だ合格！！」

「流っ石、ご主人様、すごいのですぅ～」

「おうよ、俺様にかかれば楽勝楽勝！」

「楽勝なのですぅ～」

と、そこには自分のパートナーであろうマオチャオ型の神姫と共に喜びまくっている一人の少年。こちらは黒のツンツンヘアーに人懐っこそうな目をしている。余りに騒ぎすぎなのか落第してしまった人達が恨めしそうな視線を向け始めるが、一人と一機はそれに気づかず「神妃高校、キタ～～～～！」と未だバカみたい騒ぎまくっている。少年もそんな彼らの様子を唖然と眺めていたが、その視線に気づいたのか彼と目が合い、やがて自分の方に近づいてくる

「んん〜〜？」

「ご主人様？」

「え、えっと……俺が、何、か？」

自分の顔をジッと覗き込んでいる相手に少し引き気味になりながらも、訊ねるとやがて彼は少年から顔を離し

「もしかして……お前、拓哉（たくや）か？」

「えっ？　まさか……甚平（じんぺい）！」

ここは、神妃市の神姫センター。神姫センターとは公式バトルと呼ばれる小規模の大会に使われる会場を始め、神姫協会直営のオフィシャルショップやカスタムエンジニアと呼ばれる人々によって改良されたパーツを取り扱うプレミアムショップ、その他にも談話スペースや軽飲食フロア等が存在している神姫と共に暮す人なら誰もが利用していると言っても過言では無い神姫関連全般の管理、運用を行う神姫協会が運営する大型施設だ

「いや〜、懐かしいぜ。まさかあんな所で旧友と再会するなんてよ」

「まさかは俺の台詞だ。小学校を卒業した後、遠くの町に引っ越し

たってあいつから聞いたけど、神妃市に住んでたんだな。更に同じ高校を受験してたなんて偶然ってのは恐ろしいな」

この二人の少年。名は天音拓哉と大木戸甚平、小学校時代の幼馴染であったこの二人も今は神妃高校から神姫センターに移動し、軽飲食フロアでハンバーガーを食べている

「この町に住んでるなら、いや、住んで無くても神姫のマスターやってるなら高校の第一志望は殆ど神妃高校になるからなぁ。と、紹介が遅れちまったな。こいつはたま子、判ってるとは思うが俺の神姫さ。んで、こっちが天音拓哉、前に言ってた小学校時代の親友だ」

「たま子ですぅ〜、ふつつつか者ではありますがよろしくお願いしますですぅ〜」

そこで思い出した様に甚平がたま子と拓哉にそれぞれの紹介をするとたま子も自分自身の自己紹介を始める。言葉の単語をを一つ間違えているが……

「ん、こちらこそよろしくな」

「で？」

拓哉もコーラを一口飲んだ後に言葉を返すと、甚平が周りをキョロキョロと見渡す

「で？　てのは？」

「とぼけるなよ。拓哉も神妃高校受けたって事は神姫やってるんだろ？　どこに居るんだ？　お前の神姫は」

甚平が期待に満ちた表情で訊ねてきたが、拓哉それに「あ～」っと少し言いにくそうな反応を見せると

「スマン、神姫は居ないんだ。そもそもマスター登録すらしていない」

「はぁっ！？　マスターじゃないってのに神妃高校を受験したって事か？」

先に甚平が言ったとおり、神妃高校はその独自の教育システムから神姫のマスターをやっている学生なら誰もが第一志望にする高校で、しかも同じ敷地内に経つ神妃学院大学部へのエスカレーター方式の学校だ。つまりそれだけ受験の競争率が高く、一般入試ならば低くても倍率１０倍は堅く、二人が受けた推薦入試でも倍率４倍はある超難関校なのだ。そしてその独自の教育システムも神姫が居なければ意味を成さない。神姫が居なくても授業は問題無く受けれるがマスターで無い人間ならば諦めて他の高校を受験するのが普通だ

「どちらかと言うと神妃高校を受けたのは神姫を始める為、更に言えば神妃市に住む為だったんだ」

神姫は確かに日本全国で一大ブームを巻き起こしており、神姫のマスターになる為に日本にやってきたと言う外国人も居る。けれど、拓哉の住んでいた町は例外の一つだった。

「俺の住んでる町ってものすごい田舎町でさ。神姫センターはおろか、協会公認のホビーショップすらないんだ」

神姫と言うのは何処にでも売っている訳では無い。協会直営のオ

フィシャルショップか、協会の方で神姫を取り扱う事を許可された協会公認のホビーショップでしか見つからない。そして拓哉の住んでいる地域はそれがどちらも無かった。つまり、日本の中で数少ない神姫が盛んでない町、と言うことだった

「でも、俺の親父は役場に勤めているから引っ越す訳にもいかない。かと言って神姫の事も諦めたくない。だから――」

「神妃高校に入学して一人暮らしを、って事か」

顎に手を当てながら拓哉の言葉に続く甚平。確かにその理由なら納得だ

「まぁ、最初は親も反対したてたんだ。学費もそうだけど生活費仕送りの関係もあるし」

神姫と言うのはおもちゃと言うよりは既に小人に近い存在だ。とは言え、神姫がおもちゃである事に変わりは無い。拓哉の言っている事は「流行のおもちゃで遊びたいから一人暮らしをする」と言ってるのと同義。確かに親がそう簡単に許すはずも無い、ましてや神妃高校は大学へのエスカレーター式、子供のあおもちゃの為に7年分の学費と生活費を仕送る。余程、神姫好きな親で無い限りまず認めない

「話し合いの末、父さんは二つの条件を出してきた。一つは神妃学院への推薦入学、しかも第一種奨学金による学費の免除付きで合格する事。二つ目、神姫はあくまで自分の力で手に入れる事、この二つを飲むなら神妃市での一人暮らしを認める、ってね」

「第一種奨学金による学費免除って、全受験者の中で上位5名しか

受けれない制度じゃねぇか……」

神妃学院には奨学金制度が設けられており第一種と二種に分かれている。二種が大学卒業後に返済しなければならないのに対し、第一種は返済不要の奨学金。けれど、これは誰もが受けれる制度ではない。第二種は一般合格者の上位５名と推薦合格者の上位１０名が受けられ、その中でも更に推薦合格の上位５名に入った人間が第一種も選ぶ事が出来る

「で、どうだったんだ結果の方は？」

「推薦合格第５位」

「も、ものすごくギリギリですぅ……」

「全くだ。中学の三年間、この条件の達成に全力を尽くしてきたってのにそれでもギリギリだったんだ……如何にこの高校が超難関校と呼ばれたか良く判ったよ」

我ながら良くがんばったな、と拓哉は少し遠い目をしていたがふと思い出した様に

「そういや、甚平の方こそどうだったんだよ？　合格者上位十名が載っていた用紙が張り出された後に大騒ぎしてた訳だし」

「俺か？　俺は確か……」

「ご主人様の番号は一番上に載ってたのです～」

「一番上、って事は主席合格かよ……」

まぁ、甚平なら納得出来なくも無い。この底抜けに明るい幼馴染、普段の見た目に反し、実は頭を使う事に関しては超が付く天才だ。俺と甚平、そして小早川千歳と言うもう一人の幼馴染の三人でよくテストの見せあっこをしていたが甚平は殆ど満点ばかり取っており、時より1，2問落とすもそれもうっかりミス、ちょいミスと言うレベルだ

「まぁ、主席だろうが5位だろうが学費免除には変わりないんだし、よかったじゃねぇか。これで親の口をあかしてやれるってもんだろ？」

「ご主人様ぁ～、それは違いますぅ。口を明かすじゃなくて、目を明かすですぅ～」

「おおっと、こりゃ一本取られちまったな。アハハハハ」

「アハハハですぅ～」

「鼻をあかす……な」

ホント、人は見かけによらないものだ

第3話『転機の約束』

「っと、そうだ。すっかり忘れてた」

ポテトを食べていた甚平が突然、テーブルに備え付けられていた小型ディスプレイのスイッチを入れる。そこに映し出されたのは、廃墟。そしてそこでは二体の神姫、セイレーン型のエウクランテがバトルをしていた

「今日はエウクランテクイーン杯をやってるんだ。丁度、決勝戦みたいだな」

二人と一機はそのままディスプレイに釘付けになる。片方がエウクランテ型の純正武装、クローのゼピュロスでラッシュをかけているのをもう片方が大剣で防いでいる。やがて、大剣を持った方がバックステップで距離をとったかと思うとそのままバーニアを使い急上昇。相手の方がクローをデータ化し収納すると今度はビームランチャーボレアスを取り出し撃つも、それも避けられた。やがて、宙に居る方は相手の真上に来ると今度は大剣を振り上げ落下。相手もそれを受けるべく。ダブルナイフのエウロスをクロスさせて受け止めようとする

「……ダメだな」

拓哉がそう呟いた瞬間、落下してきた方が剣を振り下ろし、相手が受け止めるも防いだ方は防御を破られ地面に叩きつけられた。何とか立ち上がろうとするも、やがてそのまま地面に伏し、試合終了のブザーが鳴る

「唯でさえ重い一撃を持った大剣、しかも重力が乗せられた一撃だ。真っ向から防いだのはマスターの判断ミスだ」

「ほ～、じゃあ拓哉だったらどうする？」

「そうだな……相手が振り下ろす直前を見極めて抜き胴で一撃当ててから追撃、って所だな」

「いやいや拓哉じゃねぇんだから、そんな事は剣道素人じゃできねーっての」

そう、この言葉の通り、拓哉は中学時代剣道部に所属、段級位一級持ちで全国大会で優勝した事もある。特に剣道が好きという訳では無いが通っていた中学が剣道の強豪校で拓哉も部活での内申を稼ぐ為に所属し稽古に明け暮れていた

「それに多少は応用できるかもしれないけど、神姫バトルと剣道は違うからな。そこは覚えておいた方がいいぜ。と、大会も終わった事だし今度はオフィシャルショップにでも行って見るか？俺のねーちゃん、そこの店長なんだ」

そう言って、ディスプレイを消すと二人と一機は席を発ち、バーガーショップを後にした

オフィシャルショップ、神姫協会が直営する神姫専門店でありその品揃えもホビーショップよりずっといい。基本は神姫センターなどの神姫の関連施設にしかない店だ。

「姉ちゃん！」

「野乃姉、こんにちわですぅ」

「あら、甚平、たま子ちゃん、いらっしゃい。受験の方はどうだった？　って、あら、そちらの子は？」

そこで店員のエプロンをつけ、黒い腰まで伸ばしたロングヘアーに優しそうな目に眼鏡を掛けた女性が棚の傍にしゃがみ込み、商品の在庫チェックを行っていたが甚平が声をかけると同時に立ち上がりながらこちらを振り向き、近づいてきた。大木戸野乃香、甚平の姉で拓哉達三人が遊ぶ時の保護者的位置に居た女性である

「受験はバッチリ！　それにより――」

「お久しぶりです。野乃香さん」

「その声……もしかして拓哉君？　懐かしいわねぇ、元気にしてた？」

「ええ、お蔭様で」

「もう、固いわよ拓哉君。昔みたいに野乃姉って呼んでもいいのよ？」

「いや、流石にそれは……」

小学生ならいざ知らず、中学生（しかももうじき高校生）にまでなってその呼び方は流石に恥ずかしかった

「ふふ、冗談よ。そんな事より拓哉君はどうして此処に？」

「拓哉も神妃校受けてたんだよ。そんで合格発表会場で出くわしたんだ」

「そうだったの、それじゃ拓哉君も神姫をやっている訳ね」

「いえ、実は違うんです――」

拓哉が自分の両親との約束の話を終えると野乃香さんは目を伏せたまま考え始め

「しっかし、拓哉の両親も厳しいよな～。神姫をやりたいなら学費免除でで合格しろなんて厳しすぎだろ」

「きっと……」

そこで野乃香さんはどこか悟った様な目で二人を見ながら口を開いた

「拓哉君の両親は意地悪でそんな条件を出したんじゃないと思うわ。神姫は確かにおもちゃよ。でも、彼女達にはちゃんと意思や感情がある。つまり神姫のマスターになるって事は動物を飼うのと同義。そこにはマスターとしての責任が生じるわ。拓哉君の神姫への情熱が確たるモノか両親はそれを試す為にそんな条件を出したんじゃないかしら？」

一人暮らしと言うモノがどれだけ大変か、それは大人である親が一番判っていたのだろう。一人暮らしがつらいからと神姫を捨てて親元戻るなんて事は褒められた者ではない。だからこそ、それだけの覚悟があるか試すための条件、そこまで考えてはおらずただ単にお金の都合だとかそんな理由で出したものだと思っていた二人は彼女の言葉に何も言えなくなっていた

「まぁ、でも拓哉君はその条件をしっかり果たしたんでしょ？　だったら胸を張ってお父さんとお母さんに報告しなさい。きっと今度は快く認めてくれるはずよ？」

「はい……」

「さてと、となるとこれからは拓哉君もここのお得意様になる訳ね。知り合いよしみでサービスするわよ、気持ちだけ」

「気持ちだけよ！？」

姉の言葉に甚平がツッコミを入れ、場の空気が明るくなった所で店の自動ドアが開き一人の少女が入ってきた。眠たそう、と言うよりは儚げな目つきをし、背中まで伸びだ茶髪をみつ編みにしてそれを肩から背中では無く前の方に下ろしコートに親指だけが分れた手袋、口元を隠すぐらいのモコモコのマフラーを巻いている。

「……こんにちわ」

その少女は店内をきょろきょろ見渡し、こちらの姿を見つけると近づいてきて軽く会釈しながら静かに口を開いた

「遥ちゃん、いらっしゃい。今日も神姫を見に来たの？」

顔馴染みなのか、野乃香も親しそうに声をかけると遥とよばれた少女は無言で頷いた。かと、思うと拓哉の姿を見て軽く首を傾げと、今度は甚平が

「天音拓哉って言って俺の小学時代の親友だよ。拓哉、こっちは――」

「志筑遥、よろしく……」

「あ、うん。よろしく、な」

物静かだが愛想は悪くないらしく、薄く笑みを浮かべながら簡単に自己紹介を済ませると遥はそのまま神姫素体の並ぶ棚に歩いていった

「あの子もこの街の子なんだけど、拓哉君と同じで自分の神姫が居ないの。どうやら家の都合らしくてね。でも、よほど神姫が好きみたいでこうしてよく此処にきては神姫を眺めているのよ」

「そうなんですか」

「と、そうだわ。甚平、せっかく来たんだしたま子の定期チェックしていく？」

「そうだな、そんじゃお願いするわ」

「お願いするわ、ですぅ」

甚平からたま子を預かると野乃香は店の奥の方に引っ込んだ

「たま子、どこか悪いのか？」

「そんな訳じゃないさ。自分の大事な相棒なんだ、体調に気を使うのもマスターの勤めってもんだろ？　人間で言う、健康診断みたいなもんさ。さて、俺はちょっと武装の方を覗いてくるから拓哉も好きに見て回ってくれ」

そういい残し、甚平もその場を離れていった。拓哉は手持ち無沙汰にしていたが、やがて遥の隣に立つと

「毎日、此処に来ているんだって？」

「うん……」

「そっか……俺は此処に来るの、ってか神姫を生で見る事自体、初めてなんだ」

「……そうなの？」

「ああ、俺の住んでるとこ、神姫が全然盛んじゃなくてな。俺もまだ持ってないんだ、自分の神姫」

すると、遥は少し表情を険しくすると

「神姫はモノじゃない……だから、持ってないなんていい方は、違う……」

「そうだったな。ゴメン……」

「……うん」

拓哉の謝罪に満足げに頷くと遥は、再び神姫に目を戻し、拓哉も同じ様に神姫を見つめる。箱の透明のビニールの部分から姿を覗かせる神姫はこれだけを見ればただの人形にしか見えないが、バトルや様々な所で笑ったり、怒ったり人と同じ様に動いている姿を見た二人には、目の前の神姫達はまるで眠っている様に見えた。まだ見ぬ自分のマスターとの出会いを心待ちにしながら

「それじゃ、俺は帰るよ。帰って必要書類も書かないといけないし」

「……それじゃ」

「おう、そんじゃまたな。っと、その前に拓哉、携帯もってるか？せっかくだし番号とアドレス交換しとこうぜ」

「あ……わたしも、いい？」

「当然！」

あれから、三人は夕方までオフィシャルショップで神姫を見たり野乃香さんとお話をしたりしてもう既に夕方になっていた。拓哉はそろそろ帰宅するべく、駅に向かい甚平と遥の二人はそのお見送りにきていた。そんな時、陣平がそんな提案をしたので三人はそれぞれ携帯を取り出すが

「甚平、お前の携帯って少し変わった形だな。どこのメーカーだそれ？」

二人が普通の携帯なのに対し、陣平の携帯は横の二つの辺の長さが同じでない縦に引き伸ばした六角形の様な形をしており、ボタンの付いている方が白く、ディスプレイの方は緑色をしている。拓哉が尋ねると甚平は待っていましたとばかりに

「ふっふっふっ。良くぞ聞いてくた！　何を隠そう、これはなんと――」

「バトルフォン、神姫マスターが持つ携帯で、神姫マスターの証……」

「は、遥ちゃん、俺の台詞取らないでくれる……」

まるで水戸黄門の印籠の様に携帯バトルフォンを拓哉の前に突き出しながら甚平の言葉を遮り、遥が手短に説明すると甚平はそのポーズのまま、目を遥の方に向けるも遥はその視線を無視して拓哉と番号を交換する

「……甚平も」

「お、おう……」

「神姫のマスターはみんなこれを持っているのか？」

「うー、たぶん全員って訳じゃないと思おうぜ。機種変メンドイとかって理由で従来のＩＣチップカードのままの奴もいるし。ただ、

バトルフォンには神姫マスターにとって便利なアプリが勢ぞろいだし、これから神姫を始めるなら断然こっちにした方がいいと思うぜ」

「なるほど、覚えとくよ。さて……そんじゃ改めて、またな二人とも」

「おう！」

「……また」

拓哉が軽く手を挙げて言うと、甚平は大きく、遥は小さく手を振って応え、拓哉は駅の中に戻っていった

「ふぅ……」

そしてその日の晩、拓哉は必要な書類の準備を終えてベッドの上に倒れこんだ。あの後、親に事の次第を告げると、最初は驚いていたが野乃香の言うとおり今までの事がウソの様に両親は自分の一人暮らしを認め、明日からは家事や料理の特訓を始めるそうだ。後は明日書類を投函すれば全て完了、これからは高校にあがるまでの数ヶ月は遊んで過ごせる。とは言え、今の時期はまだまだ受験シーズン真っ盛り。それから一足先に解放された拓哉は残りの中学生活何して過ごすか考えていると突然、携帯に着信が入った。差出人は甚

平からだ、内容――

『よう！　新年の予定ってもう決まってるか？　決まってねぇなら3日と4日に神姫タワーで新春神姫祭りがあるんだけど遥ちゃんも誘って一緒にいかねぇか？』

と言う内容だった

「3日から、か……」

拓哉はカレンダーに目を向ける。3日なら祖父母とかの知り合いの家めぐりも終わってるし大丈夫そうだと判断すると、拓哉は了承の返事を返し、携帯を置いた。このなんて事無い約束が拓哉にとって大きな出来事になるとは、まだ知らずに――

第４話『最高のお年玉』（前書き）

神姫の発売順や、原作キャラのパートナー神姫は物語の都合上変更する事がありますがご了承ください。また、神姫の武装に関してはそれぞれの神姫の専用武装は名前で、汎用武装は武器の種類で記述します

第４話『最高のお年玉』

神姫タワー、大規模な神姫関係のイベントや大会の会場となる施設で、巨大な高層ビルとその近くに小さいながらもドームが建てられ、更には遠くからやってきた来客や大会の出場選手為の宿泊施設も完備、敷地内の広場は大きな公園となっており、人々の憩いの場とされている神姫センター以上に大きな施設である。当然、今回の新春神姫祭りもここで開催される。何時もは穏やかな雰囲気に包まれた公園も今は沢山の出店が立ち並び、別のスペースではコンサート等のイベントが行なわれている

「すっげー……」

「わぁ……」

そんな活気溢れた様子を目の当りにし感嘆の声を上げる拓哉と遥。なんで会場に入らないのかと言うとまだ甚平が来ていないから、本人の名誉の為に言えば決して甚平が遅刻している訳では無く、ただ単に今日の事が楽しみで二人とも早く着いてしまっただけだ

「ここじゃ毎年こんなお祭りが行われているのか」

「他にも夏や秋にも同じ様にお祭りをやっているの……。でも、実際に来たのは今日が始めて」

「そうなのか？」

「家の都合で……」

「おっと……」

「…っ」

拓哉の言葉に遥は無言に頷いた後に答えると時計に目をやる、待ち合わせの時間まで後１０分チョイだ

。そして時計から目を離した時、後ろから近づいてきた男性が遥にぶつかった。手には大小のダンボールが積まれ、その所為で遥に気づかなかったのだろう。ぶつかった拍子に一番上に積まれた小さな箱が二つ零れ落ちたが、地面に落ちる前に拓哉と遥がそれをキャッチした

「済まない。荷物が多くて前が良く見えなかったもんだからね」

「……大丈夫です」

「どうぞ、落ちそうになりましたよ」

男性の謝罪に二人が大丈夫だと答え、それぞれがキャッチした箱を男性に返す。男性の姿は白の作業服に身を包み、服と同じ色の帽子を深く被っている。

「ありがとう。ところで君達は会場に入らないのかな？」

「はい、友達と待ち合わせしているんで」

「なるほど」

男性は荷物を一度下に置いくと二人の顔を見渡し、やがてポケットから二枚の細長い紙切れを取り出し二人に差し出した

「貰ったものなのだが私には必要ないからね。君達にプレゼントしよう」

その紙切れには『開運神姫くじ抽選券控え』とかかれ、４桁の番号が書かれている。よく見ると端っこの方は切れ目にそって切れた跡があるが、恐らく抽選に使う半券部分が付いていたのだろう

「……いいんですか？」

「なに、さっきぶつかってしまったお詫びと大事な荷物を守ってくれた御礼だ。遠慮なく受け取ってくれたまえ」

二人はお互いに顔を見合わせた後に男性に頭を下げ、彼も満足げに頷くと「では、仕事があるので失礼するよ」と言い残し、再びダンボールを持って会場に入っていった

「今の人、ＦＬ（フロントライン）社の人か？」

「たぶんそう……服の背にロゴマークが入ってる」

「よっ、二人ともあけおめ～」

「ことよろですぅ～」

その入れ違いに甚平とたま子が姿を現した。

「……おめでと」

「ああ、おめでとう」

「しっかし二人とも早いな、まさかとは思うけど俺が遅刻したってオチは無いよな……？」

二人が余りに早く来ていたもんだからもしや自分が時間を間違ったんじゃと思い時計に目をやりながら訊ねると

「……正解」

「マジっ！？」

「……ウソ、冗談」

「な、なんだ冗談か……」

一瞬体を強張らせるも後の遥の言葉を聞き、一気に脱力した

「あはははは、さて、全員揃った事だしそろそろ俺達も行くか」

「うん……」

「だな、ところで二人の持ってるそれってもしかして神姫くじの抽選券？」

「さっきＦＬ社の従業員とぶつかってな、そのお詫びだそうだ」

「マジかよ、うわ～失敗した。俺も早く来てりゃ良かったぜ」

そこでようやく二人の持ってる抽選券に気づき、二人はそれぞれバックと財布の中に券を仕舞いながら拓哉が説明すると甚平がっく

りとうな垂れる。が、すぐに元に戻り

「まぁ、後で神姫ポイントで買えば良いだけか」

神姫ポイントは神姫関係の買い物に使う事の出来るポイントの事だ。武装や神姫の素体は現金で買うとしたらかなりの値が張る。特に素体に至っては最新型のＰＣに迫る値段をしている。そして神姫ポイントは普通の神姫バトルのファイトマネー、今回の神姫くじの様な神姫関係のイベントの賞品、公式バトルを始めとした各種大会で好成績を残す事で溜まっていく。裏を返せばこの神姫ポイントはマスターにならなければ殆ど溜める事が出来ない為、一体目の神姫はみんな大体は現金で買い、以後は神姫ポイントで購入するのが普通だ

「抽選会は……午後から見たいだな。午前は新春バトル大会アマチュアの部があって、プロの部は明日か」

「……アマチュア？」

「プロとかって、何の事だ？」

三人が受付の人から貰ったパンフレットを確認している中、遥が甚平の言ったアマチュアという言葉について訊ね、拓哉も気になったらしく同じ様に甚平に目を向ける

「ああ、そういや二人は知らないんだよな？　神姫のマスターは大きく分けてアマチュアマスターとプロマスターに区別されるんだ。神姫協会の認定試験を受けて合格した人がプロマスターになれてＦバトルとか言った全国規模の大会に参加出来るって仕組みさ。プロマスターの大会ともなるとポイントだけじゃなくホントの賞金も出

るから、プロマスターになってそれで食ってる奴もいるんだぜ」

「最早、ただの遊びの域を超えてるな……」

「その通り、神姫バトルは既に遊びじゃなくて一種のスポーツと呼んでも可笑しくないんだ。まぁ、長い説明はこのくらいにして折角だし俺もこの大会に出てみるか。丁度、この間新しい武装を買った所だしな」

「へぇ、なにを買ったんだ？」

「新しいアックスですぅ。これで相手を大・粉・さーい！　ですぅ」

それから、大会の受付が始まるまで三人は出店を見て回っていた。普通のお祭りと違うのは神姫のお祭りだけあって、食べ物だけでなく正月限定の武装を売ってる出店もあり、くじや射的の賞品も殆どが神姫グッズや武装関係となっている。その内大会の時間となり三人は神姫タワーのドームに入り、甚平は参加申し込み、二人は観客席に移動している。大会はまずＡからＦまでの幾つかのブロックに別れ予選トーナメントが行なわれ、各ブロックの優勝者６人が総当り戦で総合優勝を決める、と言うルールの様だ

『いまだたま子！　一気に突っ込むぞ！』

「にゃ～～！」

そして、総当り戦。甚平は４勝１敗で最後の戦いを迎えている。相手は姉妹機として存在している戦乙女型神姫の妹機アルトアイネスだ。マスターはプラチナブロンドのロングヘアーをした少女。他の人と違い、高級そうな衣服に身を包んでいる事から何処かのお嬢様を思わせる。そして相手の戦績も４勝１敗で事実上、これで優勝が決まる。相手の多弾頭ミサイルと機関銃の銃撃を掻い潜り、腕の装甲と一体化した裂拳甲で殴りかかる。相手の方も大慌てで赤い大剣ジークムントを取り出し迎撃に入るも、大振りの大剣では間に合わず、たま子のパンチをモロに受ける

「にゃっ、にゃっ、にゃ～～っ！」

その後もジャブやストレートと言ったラッシュが入り、最後に上段の後ろ回し蹴りが入る。たま子の戦闘スタイルは完全近接高機動戦闘だ。武器は小ぶりと大振の武器が一つずつだけの軽量装備で相手の攻撃を掻い潜り接近戦で一気に決めると言うモノだ。バーチャルバトルなのに武装の重さなんて関係あるのかと思うかもしれないがそれはまた後程。とにかく甚平とたま子はそれのみを徹底的に磨き上げてる為、射撃戦闘や間合いを取られた場合はダメダメだが、一度相手の懐に潜り込めば無類の強さを発揮する。そして――

「『これで、フィニッシュっ！（ですぅ～っ！）』」

「うわぁっ！」『きゃあ！』

こぶしで相手がひるんだ所を新しく買ったと言っていた斧をフルスイング。アイネスは大きく吹っ飛ばされ、アイネスとそのマスターの少女が悲鳴を上げ、地面に落ち動かなくなり試合終了のブザーが響く

「うっしゃあっ！　やったぜたま子！」

「やったのですぅ！」

ライドオンシステムの際に使うバイザーを取り外し、バトルに使う筐体から出てきたたま子を自分の手の上に乗せてハイタッチをする。やがて反対側に居た少女もバイザーを外しふぅ、と息を吐くと同時にアイネスも筐体から出てきてマスターの手の上に乗る。

「くやしーーっ！　あんな奴、僕の普段の装備を使ってたら楽勝だったのに～！」

「あらあら～、そんな事を言ってはいけませんよ。それに～、接近戦でしたら普段のルナリエちゃんでも勝負は判りませんでしたわ」

自分の手の上で地団駄を踏んでいるアイネスことルナリエをおっとりとした口調で慰めている。やがて甚平の方に近づいてくると

「まいりましたわ～。とてもお強いんですのね」

「へへっ、まぁ接近戦ならそう簡単には負けない自信があるんですよ」

「ふふっ、ところで見た感じ中３の方みたいですけど高校はどちらに？」

「えっ？　えっと、神妃校に通う事になってますが」

「そうなんですかぁ。でしたら、またお会いする事になるかもしれ

ませんわね～。兎に角、優勝おめでとうございます。ではこの辺で、失礼しますね」

と、そう言い残してステージから降りていく少女。それと入れ違いに司会進行の人が近づいてきて

「優勝おめでとうございます！　さて、今年の神姫祭りはＦＬ社が中心となって開催されている為、今回の優勝賞品もＦＬ社からの贈呈となりますが準備の方がまだ出来ていないらしいので準備が出来るまでしばらくお待ちください。丁度、神姫くじが終わる頃に贈呈できるとの事ですので。では、今回優勝した、大木戸甚平君とたま子にもう一度盛大な拍手をー！」

観客席から湧き上がる拍手の雨に甚平とたま子は大きく手を振り応え、大会は幕を閉じた

「お疲れ、優勝するなんてすごいじゃないか」

「……おめでとう」

午後の神姫くじの準備の為、来客者はドームから一旦出る事になり、拓哉達と合流した甚平は二人から労いの言葉を受けていた

「サンキュー。ただ……」

「ただ？」

「最後の対戦相手、なんて言うかまるで今回は手加減して戦っているかの様な言い方だったんだよな」

最後のバトルの後、ルナリエの言っていた言葉。それがホントならば今回の戦いでは彼女達は本来の武装、つまり本気で戦ってはいなかった事を意味する

「そこが、どうも引っかかるんだよな。それに、神妃校ならまた会う事になるかもとか言ってたし」

甚平の疑問に拓哉も腕を組んで考え込むが答えは見えない。やがて

「また、会えた時に……訊いたらいいと思う」

頭を悩ましている二人に対し、遥がそう答えると確かにそうだと、二人も考えるのをやめて

「それもそっか……うっし！　悩むのは此処までにしてまた祭りめぐりでもするか！」

甚平の言葉に二人も頷くと三人は再び人ごみの中に混じっていったのだった

それから、神姫のコスプレをした女性達のコンサートが公園内の特設ステージで行われているのを昼食を食べながら観賞したり、途中、武装ではなく神姫サイズの服を取り扱っている出店でたま子に着物を購入し着せたりとお祭りを満喫した三人。昼を過ぎ夕方に近づき始めても祭りの盛り上がりは弱まらず、むしろ仕事を終えてからやってきた人々で更なる賑わいを見せている。そんな中――

「さぁ！　来客の皆さんお待ちかね。午後の部の目玉イベント、開運神姫くじの抽選会を始めたいと思いまーす！」

ドーム内にあった筐体は全て片付けられ、代わりに白いクロスが敷かれた。二段になっている横長のテーブルの上に色々な景品が置かれ、その前には円柱状の機械。透明なプラスチックの中には機械によって風が吹いているのか。抽選に使われる半券が不規則に舞っていた

「今年一年の運試しとも言えるこの企画！　今年の賞品はＦＬ社の方で神姫グッズから限定武装まで各種取り揃えてもらっております！　そしてー！　今回抽選券を引いてもらうのはＦＬ社の社長。西園寺信英（いおんじのぶひで）さんにお願いしてもらいます！」

司会がそう言ってステージ脇に手を向けるとそこからスーツに身を包んだ男性が観客に手を振りながら姿を現した

「あの人！」

「会場でぶつかった……」

あの時は帽子被っていた為、表情までは判らなかったが紛れも無く二人があの時ぶつかった男性だった

「皆さん、こんにちは。ただ今紹介に預かったＦＬ社社長、西園寺信英です。今回は僭越ながら神姫くじの抽選を行う事になりました。加えて、抽選の後には我が社から重大な発表もあり、この場を借りてそれを行わせてもらおうと思います。では、この新年を祝うめでたい良き日、皆さんに幸運の天使が微笑む事の祈っていますよ」

「幸運の女神じゃなくて天使、か。流石ＦＬ社の社長って所か」

「ん？　ＦＬ社である事と何が関係あるんだそれ？」

「ＦＬ社は……天使型神姫、アーンヴァルを開発した会社」

「なるほど、それで天使な訳か」

と、拓哉が納得した所で、信英が抽選機のゴム状になっている所に手を入れ、ランダムに半券を掴んでは係りの人に渡していく。やがて一等から五等まで全部出揃い、抽選結果が五等賞から告げられていく。神姫の形をしたストラップや大量の神姫ポイント、リペイントと呼ばれる色違いの武装等様々な商品が当選者に手渡されていき、残りは一等賞の発表のみとなったがその段階でステージ上にあった景品は全て無くなっている

「さて、残るは一等賞のみとなりましたがこちらの賞品も只今準備を進めており、もうすぐ整うと思いますので先に番号の発表をさせてもらいます。では――」

信英は言葉を切り、咳払いをした後にその言葉を告げる

「神姫くじ一等当選番号、２２５７番！」

信英がその言葉を告げた瞬間、遥は目を見開き、突然その場に立ち上がった

「遥？」

「おいっ、まさか！？」

遥が言葉が無いのか無言のまま二人に券を見せる。間違いなく一等の当選番号だ

「おまっ！　わざわざ見せんでいいから早く行けって。待たせすぎると無効になっちまう！」

「落ち着け甚平！　そんなあせらんでも大丈夫だ。遥もとりあえずステージに行っててくれ」

「ま、マスター！落ち着くですぅ！」

甚平が若干取り乱したのを拓哉とたま子がなだめ、遥は小走りで観客席から駆け下りステージに向かい、ステージに上がる頃には少し息切れをしていた

「おや？　君はあの時の少女だね。そうか、私のあげた券が一等賞だったという事か」

信英の言葉に無言で頷く遥。そんな彼女の様子を優しい目で見ていた信英だったが一度目を伏せ、改めて観客席に目を向けると

「では、一等の当選者が決まった所でもう一人。午前の部の新春神姫バトル大会アマチュアの部優勝者、大木戸甚平君！　もし、居るのならば君もステージへ」

「へっ？　お、俺！？」

何が何だか分からないと言った状態だが、甚平もとりあえずステージの方へ上がる

「さて神姫くじとバトル大会の景品の贈呈の前に、ここで一度、我が社からの重大発表に移らせて貰いたい」

同時にステージの後ろの垂れ幕にスクリーンが映し出される。そこには二体の神姫がフル装備でポーズを取っている画面が映っていた。そしてその後にプロモーションとして二機の神姫がバトルを繰り広げるアニメが流れる

「こちらは我が社を代表する二大神姫であるアーンヴァルとストラーフの後継機、ＦＬＯ１６－アーンヴァルＭｋ２とＦＬＯ１７－ストラーフＭｋ２です。初期の二体が他社が次々に生み出している最新鋭の神姫達に対抗するのには限界がありました。故に今回この二機の開発に着手、つい先日プロトタイプの完成に至りました。無論、神姫の強さは神姫の新旧が全てではありません。現Ｆ１クラスのチャンピオン、竹姫葉月さんも初期のアーンヴァル型で並み居る強豪達をなぎ払いチャンプの座を不動のモノとしているのですから」

すると今度はステージ脇から係員に運ばれてクリアケースに入れられた二体の神姫が姿を現したケース内の突起や段差に支えられる形で立っているがまだ起動はしておらずその目は閉じられている。

装甲は純正武装のフルアームズで、手にはそれぞれアーンヴァルは大剣をストラーフはハンドガンを持っている。しかし――

「そしてこちらが今回開発された神姫のプロトタイプ。標準のカラーリングでも良かったのですが、この新年の祝う日にただそれだけではあまりに芸が無い。故に今回この二機はプロトタイプでありながら同時にリペイントタイプとして開発しました。正式名称はＦＬＯ１６／Ｔ－アーンヴァルＭｋ２・テンペスタとＦＬＯ１７／Ｌ－ストラーフＭｋ２・ラヴィーナ」

今までのアーンヴァルが薄い金髪で白が基調だったのに対し、テンペスタは薄い紫に黒を基調としており、それとは逆に水色の髪に黒がメインだったストラーフは完全な黒髪に白を基調とした色合いをしている。

「さて、今回ステージに上がってきてもらった大木戸甚平君と……」

「……志筑、遥です」

信英は遥の名前をまだ聞いていなかった事を思い出し、彼女に目を向けると遥も察したらしく自己紹介をすると

「志筑遥君だね。では二人にはこの神姫のテスター、即ちマスターになってもらいたい。それが今回のそれぞれの景品だ」

「えぇっ！？」

「この子達の……マスターに？」

突然の申し出にギャラリーは騒然、『いいなぁ～』だの『数字が

一個違いだった～』とか声が聞こえ、甚平は仰天、遥もポカンとした表情で二体の神姫を見つめている

「無論、強制と言うわけでは無い。最終的な意思決定は「……やります」遥君？」

「この子達のマスター……やらせて下さい」

最初はポカンとしていたが、やがて遥はその目に強い意志を宿して静かながらにハッキリと告げた。それもそうだ、遥は家の都合で神姫を迎えられずに居た。そんな時に巡って来たこの機会、断るなんて選択は彼女には無かった

「中々決断力のある子だね。判った、なら君にはラヴィーナのマスターをお願いしよう。さて、後は甚平君だが君はどうするかな？遥君がラヴィーナのマスターになる以上、君にはテンペスタのマスターになってもらいたい訳だが」

遥の決断に満足そうに頷くと今度は甚平に声をかける。が、甚平は神姫をジッとみつめたまま黙っている。普段なら「マジっ！？やります！　是非やらせてください！」と大はしゃぎしそうな彼が無言のままで居る事に遥が首を傾げると

「一つ聞きたいんですけど、この二機のテスターって、腕のいいマスターじゃなきゃいけないって事はないんですよね？　でなきゃ、マスターで無い奴が当選しても可笑しくない、ってか現に当選したこの神姫くじの景品にする筈ないですし」

「ん？　まぁ、そうだね。テスターなのだからデータ収集の他に神姫の能力上の欠点とかを探す目的もあるしね。勿論テストが終わっ

た後もマスターは続けてもらうつもりだからこの子達を大事にしてくれるマスターなら誰でも問題は無いが」

下手に凄腕のマスターにテスターを頼んだらその手腕で欠点を補ってしまう可能性がある。そういう意味ではテスターには初心者かそこそこの腕のマスターをと言うのは間違いではない。やがて、甚平は決意した様に頷くと

「ちょっと待ってて下さい」

そう言って観客席に戻ると

「おい、拓哉。ちょっと来い！」

「ちょっ、いきなりどうしたんだ？」

「いいから来い！」

観客席でポップコーンを食べていた拓哉の手を引き、ステージに戻ってきた

「君は、あの時遥君と一緒に居た少年だね」

「俺の親友で天音拓哉って言うんです。信英さん、テンペスタのマスターなんですけど俺じゃなくてこいつに任せてもらえませんか？」

「甚平！？」

「ほう？」

「遥ちゃんもですけど、この二人は神姫が好きだって気持ちはものすごく強いんです」

遥は家の都合で神姫のマスターになれずとも毎日の様にオフィシャルショップを訪れては神姫達を眺めていたし、自分と会った時はたま子と本当に楽しそうに話していた。拓哉に至っては言わずとも、神姫のマスターになりたい、その一心で超難関校の神妃校を推薦上位で合格してみせた。二人の神姫への想い、それがどれだけのものか甚平は痛いほどに判っていた

「きっとこいつならすごい良いマスターになってくれると思うんでお願いします！」

「ふむ……」

しばらく信英は拓哉の事をジッと見つめ、やがて――

「天音拓哉君、だったかな？」

「は、はい」

「神姫は好きかね」

「……はい！」

拓哉が遥と同じ様にハッキリと頷くと、信英は口元に笑みを浮かべたまま目を伏せ

「良い返事だ……よし判った！　甚平君の頼み通り、拓哉君さえよければテンペスタは君に任せよう。どうする？」

拓哉はクリアケースの中で目を閉じているテンペスタに目を向けた。天使と言うよりは堕天使と呼んだ方がしっくりくる黒い神姫。やがて、信英の方に目を向ける頃には彼の返事は決まっていた

第5話『ようこそ、武装神姫の世界へ』

思いもよらぬ所から神姫のマスターとなる事になった拓哉と遥の二人。二人は今、甚平を連れて神姫タワーのスタッフルームの一室に居る。ここでテンペスタとラヴィーナの起動及び、マスター登録を済ませる事になっている。

「ところで甚平」

「ん、どうかしたか？」

二体の神姫の到着を待っている三人。そんな時、拓哉が不意に甚平に声をかけた

「その……ホントに良かったのか？　折角の機会なのに俺に譲ったりして」

拓哉の言う折角の機会と言うのは新たしい神姫のマスターになれる、と言う意味だけではない。全員とは言わずとも多くのマスターがある憧れを抱く。それは“この世に二つと無い自分だけの神姫”だ。けれど、そうした神姫のマスターになれるチャンスはあってもそれを掴み取れる事はそうそう無い。こうしたイベントでの抽選や大きな大会での景品であるリペイントタイプの神姫を、と言うのがごく一般的だが抽選は何百何千の分の1と当選の可能性は非常に低いし、大きな大会ならば優勝するだけのそれだけの実力がいる。だからこそマスター達は神姫の性能や、性格などの心の有り様を決めるCSC（コアセットアップチップ）の組み合わせを変えたり、独自の武装アセンブルを考え、少しでも他の同型神姫との差異をつけようとする

「特に今回の神姫はリペイントである以上にプロトタイプでもある。それが何を意味するかは甚平も判ってるだろ？」

更に言えば今回の場合はリペイントだけでなくプロトタイプと言うのも関係している。プロトタイプと言う事は起動テストを経て、製品化に向けてのプログラムの改善や調整が行われる。つまり今回の２機は悪い意味も含むが外見も中身も違う、ホントの意味でのこの世で一機しか存在しない神姫となる。

「まぁ、ぶっちゃけ言わせて貰えば、ものすご～～く惜しくは有るけどよ。俺にはもうたま子が居るし、それに同じ様なチャンスはまた来るだろうしな」

そう言って大会で疲れたのかパワーセーブモード、即ちお昼ね状態のたま子に目をやる。掴み取れる可能性は少なくてもチャンスそのものが少ない訳では無い。神姫が盛んである限り、ＦＬ社を始めとした各企業は新型の開発に力を入れていくだろう。そもそも新型のテスターをイベントの賞品にすると言うケースは過去にも良くある事だった

「これで親友が晴れて神姫マスターの仲間入りする事が出来るなら今回は潔く譲る事にするよ。あっ、でもお礼はしっかりしてもらうぜ、そこは譲れねぇからな？　とりあえずは神姫祭りの最中は全部拓哉の奢りって事で！」

「判ったよ。全く……そう言う所はホント抜かり無いな、お前って」

途中まではすごく友達思いの良い事を言っていたが最後の最後でちゃっかりしている。人差し指と親指で輪を作りながらギブアンドテイクを持ち出す甚平に拓哉も苦笑を浮かべながら言葉を返すと「

ヤリィッ！」と甚平は指を鳴らす。ちなみに遥はを言うと楽しみで仕方ないのか、さっきから片時もドアから目を離さず自分のパートナーの到着を心待ちにしている

「済まない、待たせたかな？」

その時、ドアが開き、スタッフの人と信英が入ってきた。その手には二人にとって見覚えのある箱を持っている。そう、ぶつかった時に地面に落としそうになり二人がキャッチした箱だった

「もしかしてそれの中身があの二機だった？」

「その通り、そういう意味ではこの二機のマスターに君達が選ばれるのはどこか運命じみたモノを感じずにはいられないな」

神姫の入った箱を二人の前に置かれ二人が蓋を開けるとそこにはさっきと違い、武装と素体が別々にしまわれている神姫とクレイドル、武装に関する説明書。そしてＣＳＣが入っている

「それと私個人の方から、二人には新たなマスターの誕生を祝ってこちらを送らせてもらうよ」

「……バトルフォン」

そう言って信英が差し出したものは二つのバトルフォン。ヘッド部分のカバーカラーはそれぞれ黒と薄い紫色、どうやら2機の神姫のヘアカラーに合わせているらしい。お礼を言いながらがそれを受け取る

二人

「とは言え、機種変更はまだだからそっちの方は後で専門店で各自済ませておいてくれ」

そして、いよいよ二人は神姫の起動準備に取り掛かる、普通はＣＳＣの組み合わせを考える事から始めるのだが今回はテストと言う事で基本性格設定で起動する事になった。ＣＳＣをセットし終え、神姫をパソコンとつなげたクレイドルにセットする。クレイドルと言うのはパソコンを通じ神姫の充電を行う装置の事だが、形状が背もたれが少し鈍角に傾いた手すり付きの長椅子の形をしている為、充電器と言うよりはベットに近い印象を受ける。後はパソコンの方で起動プログラムを立ち上げ、初期充電の完了を待つだけだ

「さてと！　それじゃあ待ってる間に俺の方からバトルフォンの機能についてレクチャーすっか」

「……よろしくお願いします」

「うむ。それじゃ、二人の奴は機種変手続きをしないと使えないから俺のを使って説明するぞ」

そう言って甚平は自分のバトルフォンを取り出して開く

「改めて、これがバトルフォン。自分がマスターを勤める神姫、所持している神姫ポイントと登録した所持武装やアセンブルのエディット。プロマスターになればＦバトルにおけるランクと順位と言った、マスターに関する基本情報は全てこれに記録されているんだ」

「……エディット？」

「自分の神姫やポイントはともかく所持武装の一覧、ましてや武装

の組み合わせまで記録しているのか？」

「ああ、リアルファイトならあまり関係ないけど、ライドオンバトルやバーチャルバトルをする時にはこれが重要になってくる。まぁ、それは実際にバトルをする時に説明するとして話を続けるぜ。他にも神姫ポイントで支払いを行う際はこれが財布代わりになる、ってのは二人ももう判ってるよな？」

甚平は神姫ポイントで買い物をする際にはバトルフォンをお財布携帯の様に使っていた事からそれは予想できた為、普通に頷いた

「と、まぁここまでは従来のＩＣカード型と同じで、バトルフォンのすごさは此処からだ」

そう言って、甚平は更にバトルフォンを弄るとディスプレイにはまるでレーダーの様な画面が表示され、その真ん中近くに緑色の点が点滅している

「バトルフォンにはＧＰＳを利用して登録した神姫の位置を示すレーダー機能や、離れた場所での神姫との通信機能が搭載されているんだ。特に通信機能に関してはマスターの基本情報とは別の通信用の登録を行えば他のマスターの神姫とも通信が出来る。これで万一、神姫とはぐれても通信やレーダー機能ですぐに位置を把握しやすくなるって訳だな。バトルフォン発売前に生産された神姫はバトルフォン未対応で、その場合は専門の業者に持っていてバトルフォンに対応出来る様にカスタムしてもらう必要があるけど……まぁ二人の場合は関係ないな。新型なら当然バトルフォン対応だろうし」

と、そこでパソコンの方から電子音が聞こえた。どうやら、起動準備が完了したらしい

「おっ、丁度準備の方が整ったみたいだな。そんじゃまお待ちかねの神姫の起動とマスター登録と行きますか！」

待ちに待った瞬間。まずは遥が左手を軽く握り、それを胸に当てた状態でゆっくりとパソコンのエンターキーを押した

「ＦＬＯ１７／Ｌ－ストラーフＭｋ２・ラヴィーナ、初期起動モードに移行。マスターの登録及び神姫の名称設定を行って下さい」

「神姫は最初に起動した時は初期起動モードになっているんだ。神姫の視界に自分の顔が映る様にしてから何かを話す事でマスターが登録される仕組みさ。名称の方はＰＣの方に入力画面が出るからそこに入力すればいい」

「えっと、それじゃ……よろしく、ね」

遥がラヴィーナと目を合わせておずおずと声を出すと

「容姿登録、声紋認証確認、マスター登録を完了。次に神姫の名称設定に移行します」

「名前……」

遥はしばらく考えていたがやがて頷くと

「決めた……あなたの名前は」

遥はパソコンに名前を打ち込み、再びラヴィーナと目を合わせ

「……レイナ」

そう告げてエンターキーを押した

「名称『レイナ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動へ移行します」

そう言って、ラヴィーナことレイナは再び目を閉じ、また開けた。さっきと違うのはその目に光が宿っており、レイナは体を起こし立ち上がると、遥の方に目を向けて

「はじめまして。突然で申し訳ないが、私はマスターの事はどう呼べばいい？」

「遥でいい……よろしくね、レイナ」

「遥、か。判った、よろしく頼む」

遥は無言で頷く。その表情は喜びで僅かに赤みを帯びている

「レイナの方は無事に起動したな。それじゃ次はテンペスタの方だ」

「はい」

拓哉は返事をするとテンペスタの方に向き直り、深呼吸をしてからエンターを押す。やがて、レイナ同様、テンペスタも初期起動モードに入り、さっきの遥と同じ様にマスター登録を済ませ、名称設定に入る。拓哉は顎に手をあてて彼女の名前を考え始めるやがて――

「セフィ……今日からお前の名はセフィだ」

「名称『セフィ』、登録完了。初期起動モード全プロセス完了を確認。通常起動に移行します」

そしてテンペスタ改め、セフィも一度目を伏せてこちらはゆっくりと目を開け、ゆっくりと立ち上がる

「初めましてマスター！　マスター事はどういう風に呼べばいいですか？」

「それじゃ、今のままマスターで良いかな」

「判りました。それじゃあマスター、改めてこれからよろしくお願いしますね！」

セフィは明るい笑顔で言うと拓哉も同じ様に笑みを浮かべる

「ああ、こちらこそよろしくな。セフィ」

「はいっ！」

二体の起動を見届けると信英は拓哉と遥の肩に手を置いて、２人と２機は信英の顔を見上げた

「どうやら、二体とも無事に起動できたようだな。これでレイナとセフィは二人の神姫となった。君達にとって初めての神姫だ。だからと言う訳ではないが末永く大切にしてくれ。そして――」

信英はそこで言葉を一旦、切り

「ようこそ、武装神姫の世界へ」

新たに誕生した二体の神姫と二人のマスターに歓迎の言葉を告げたのだった

第6話『神姫マスターとして、彼女の本当の実力』

「これは一体どう言う事だ、西園寺社長！　なんで一等の当選券が僕じゃなくて他の奴の手にあったんですか！？」

神姫タワーの宿泊施設の一室、信英が止まっている部屋に一人の少年が押しかけていた。身なりの良い服装にオールバックの金髪。如何にもお坊ちゃまと言う感じの少年が、備え付けのテーブルに手を叩きつけ信英に詰め寄っており、テーブルの上には少年の神姫と思われる。火器型神姫ゼルノグラードが無言で佇んでいる

「すまない、明久君。どうやら実行委員の方で不手際があったらしくてね。本来、君に渡すはずだった抽選券が彼女の手に渡ってしまっていたらしい」

「不手際じゃすまないだろ！　なんの為にあんだけの大金払ったと思ってるんだ！？」

明久と呼ばれた少年は怒り心頭で信英を問い詰めているが、当の本人は涼しい顔で流している

「明久君。今回の事もそうだが、何でも親の権力や金で解決できるモノとは思わない方が良い。今回の件は不幸な事故だと思って諦めて欲しい。勿論、貰ったお金の方も君の父親に返してある」

その言葉に明久はしばらく信英を睨み付けていたが、やがて舌打ちをした後に「失礼します」と言ってゼルノグラードと共にドアを乱暴に開け閉めして部屋を出て行った。それを見送り信英はソファに体を沈め

「やれやれ、小さい頃の甘やかしすぎが原因とは言え、北条の方も大変だな……」

その頃、拓哉と遥はセフィとレイナの武装が入ったケースをその手に持っており、二人の肩にはそれぞれのパートナーが座っている。会場の外に出ると既に日が傾き始め、祭りの初日は終わりを迎えようとし、帰路につく人々も出始めている。そんな時、甚平の頭の上に居たたま子がゆっくりと目を覚まし

「よく寝たですぅ。って、ありゃ、もう夕方ですかぁ？」

「そういや拓哉。あんたはこの後どうするんだ？　一旦、家に戻るのか？」

「ああ、一応そのつもりだが」

「だったらよ、折角だし俺ん家に泊まっていかね？　姉ちゃんと二人暮らしだから、たぶん問題はないだろうし、祭りは明日も続くんだ。電車賃だってバカにならんだろ？」

「いいのか？」

「良いって良いって。姉ちゃんにセフィとレイナの事も紹介しないといけないし、それに新米マスター二人に教えてやりたい事はまだまだ沢山あるしな」

「ちょっと待って」

そう言うと拓哉は携帯（普通の方）を取り出し自宅に電話を掛ける。やがて、2，3言話した後携帯を切ると

「野乃香さんに迷惑掛けない様に、だとさ」

「決まりだな。それじゃ早速「あの……」どうかしたか遥ちゃん？」

拓哉と甚平が話を進めていると遥もオズオズと小さく挙手して切り出した

「お泊り……私も、いい？」

「えっ！？　いや、まぁ家には姉ちゃんも居るからたぶん大丈夫だと思うけど……遥はこの町に済んでるだろ？」

「いいの……私、家で一人暮らしだから。親もたまにしか帰ってこないし」

そう言った時、遥の表情がものすごく沈んでいたのをレイナは見逃さなかった

「そうだったのか……まぁそれなら問題ないな。なら姉ちゃんに聞いてみるか」

遥の表情の変化にこそ気づかなかったが、なんで親が居ないのか、流石にそこまでは踏み込むべきじゃないと考えると拓哉と甚平は互い目配りをすると深くは言及せず、サラリと流す事にした

「この時間帯なら、まだオフィシャルショップだな。丁度いいからバトルフォンへの機種変手続きもしとこうぜ」

今後の予定が決まると一同は神姫センターの方へ足を運んだ

「いっらしゃい……って、あら、三人ともどうかしたの……って、拓哉君、遥ちゃん、その神姫どうしたの！？」

流石に、今日はお祭りと言う事もあり神姫センターにはあまり人は居らず、オフィシャルショップも殆どガラガラで野乃香も退屈凌ぎにレジのカウンターの席に腰を下ろし本を読んでいた。そんな時、店のドアが開き、拓哉達が入ってきたので本をとじて顔を上げたのだが二人の肩に乗っている神姫に気づき今度は思わず立ち上がった。そしてカウンターで今日のお祭りでの出来事を聞くと

「なるほど、お祭りのイベントの景品だったのね」

「はい、初めまして野乃香さん。セフィです。よろしくお願いします」

「レイナ。野乃香、だな。よろしく頼む」

「ええ、よろしくね。セフィちゃん、レイナちゃん。それにしても

――」

二機との自己紹介を終えると野乃香は甚平に目を向けると

「甚平の事だから「マジっ！　やるやる！　是非やらせてください！」って感じで真っ先に飛びつくと思ったのにそんな事を言ったなんてね～。明日は槍でも降るのかしら？」

「オイオイ、実の弟に向かってなんて事言ってんだよ……」

そんなやり取りを済ませた後、その後は拓哉と遥のバトルフォンへの機種変更手続きを行い、携帯ショップへ提出する書類は野乃香さんに任せ、拓哉達はセンターを後にした。

「それじゃ、早速俺ん家へ……と、言いたい所だが夜まではまだ時間もあるし、もう一箇所寄り道と行こうぜ」

「どこにだ？」

「へへっ、物凄く良い所さ」

「普段はもっと賑ってるんだが、お祭り時期の、しかもこの時間じゃこんなもんか。まっ、人が少ない方が今回はいいかもな」

そう言って、甚平が二人を案内したのは市のゲームセンター。そう、甚平は二人に神姫バトルを教えるべく二人を此処に案内したの

だった。が、甚平の言うとおり普段は沢山のギャラリーやマスターで溢れかえっているはずのバトル用の筐体のあるスペースも今は数人のマスターがチラホラ居る程度だ。が、その中に見慣れた少女が居た

「あれ？　あんたは確か――」

「あら？　大木戸甚平さんにたま子さん、こんな所で会うなんて、奇遇ですね～」

「あ～、大会の時の人ですぅ」

そこに居たのは甚平が大会で戦ったルナリエとそのマスターだった。優雅だが相変わらずどこかおっとりした雰囲気をしている。彼女が拓哉達に気づくと「あら～」と声を出して

「次にお会いするのは神妃校でと思ってましたのにもしかして私達って、よほど縁があるのかもしれませんわね～」

すると、少女は拓哉達の方に目を向けて

「まぁ～、噂の新型と、そのマスターさんですね～。名前は確か、天音拓哉さんと、志筑遥さん。」

「あ、はい。よろしく」

「……よろしく」

「レイナ、あんたの言うとおり遥のパートナーだ」

「セフィです、よろしくお願いします。えっと……？」

「あ、申し送れましたわ。わたくしロザリンド・明日奈・フルーベルと申します。名前が長いので～ロザリーと、お呼び下さい。そしてこっちがわたくしのパートナーの」

「アルトアイネスのルナリエだよ」

「よろしくお願いしますね～」

そう言うとロザリンドの手の平の上に載っているルナリエも自己紹介を終えるとロザリンドはゆっくりと一礼をして自己紹介を閉じる

「もしかして、ハーフ？」

「ええ。お察しの通り、わたくしフランス人と日本人のハーフですのよ～。ところで～、皆さんはどうして此処に？」

「折角なんで新人二人にバトルについて教えてやろうかと思ったんですよ」

「そうなんですか～」

するとロザリーは顎に人差し指を当てて「ん～」何かを考え始め、数秒ほどしてから

「でしたら～、お邪魔じゃなければわたくしもご一緒させてもらってもよろしいですか？」

「勿論、オッケーですよ。さて、それじゃまずはターミナルに――」

「少しいいかな？　そこの君」

そして、ロザリーも交え改めて神姫バトルの準備をするべく筐体近くにある縦長の装置傍に行こうとした所で声を掛けられた

「ん、誰だあんた？　なんか用か？」

「平民は黙っていたまえ、君には用は無いんだ」

「誰だ？　知り合いか？」

「う～ん、どっかで見た様な記憶はあるんだが……」

と、甚平は腕を組んで記憶を探っていたがやがて思い出して

「あ、そうだ。今日の大会の決勝ブロックに居た奴だ」

「こちらのお方は確か～、北条コンツェルンの御曹子さんでしたわよね～？」

北条コンツェルン、神姫バトルを支持するスポンサーの大手企業の事だ

「その通り、僕の名は北条明久。君達の様な平民風情がおいそれと話せる相手じゃないのさ。ただ、今回は大事な用があるから特別さ。さて、そこの新型のアーンヴァルを連れた君」

「俺？」

「そうだ、それは本来は僕が貰い受ける筈だった物なんだが、イベントの実行委員の方で不手際があったらしくてね、悪いけどそれは僕に返してくれないかな？」

「わ、私をですか！？」

「えっと……？」

突然の事にセフィは驚きの声を上げるも拓哉の方は本気で話の意味が判らず、甚平に話を振ると甚平はすぐに呆れ顔になって

「たぶんあれだろうな。大方こいつが実行委員か何かに大金払ってあの抽選会で八百長してもらおうとしたんだろうな」

甚平の言うとおり、新春神姫祭りの打ち合わせの為、ＦＬ社を訪問した父に着いて行き、その時に開発されていたアーンヴァルＭｋ２テンペスタを大層気に入り、信英にテンペスタを寄越すよう言い出し始めた。やがてそれが抽選の景品と知るや否や大金を出して八百長を申し込んできたと言う訳だ。そして、信英はそれを受け取り、その場は承諾した。けれど、それには別の意図があった。

彼の父親、北条コンツェルンの現社長は自分の学生時代からの仲。そしてそんな彼が昔の朕の所為で何でも金や権力で解決しようとする性格になった息子にホトホト手を焼いているのを知っていた為、金や権力で解決できない事もある事を思い知らす為に一計企てる事にしたのだ。実際、姫祭りの実行委員の方にはなんの不手際も無い。抽選機の中に入ってる半券の中に一枚だけ目印をつけたもの混ぜてその抽選券を自分に渡す、それが明久の立てた作戦でそれ自体は問題なく進んでいた。ただ単に信英がその抽選券を実行委員会の手違いと称して、密かに遥に渡していた事を除けば

「ほう、平民の割りには頭が回るじゃないか。ならば話は早い。そう言う訳だ、つまり本来その新型は僕のモノになる筈だったんだ。大人しくこちらに返してくれないか？　ああ、もちろんタダとは言わない」

そう言うと明久は未記入の小切手帳を取り出しそこに手馴れた筆運びで金額と署名を書き込み、拓哉の手に握らせた

「八百長の際に支払った２００万だ。その新型の代金代わりとしてキチンと支払うから安心したまえ」

そして拓哉の肩に乗っているセフィに手を伸ばすが、その手を拓哉は払いのけると小切手を破り捨て

「気に入らないな……神姫をモノの様に扱う態度も、あんたのその性格も」

「マスター……」

「モノの様にって、現に神姫はモノじゃないか。何をムキになっているんだい？　ああ、なるほど。確かにその新型はこの世に２つと無い、物凄くレアな代物だ。返したくない気持ちも判るよ。けど、２００万もあれば最新鋭の神姫が何体も買えるんだ。どちらが特かは少し考えれば「話にならない……甚平」

明久の言葉を完全に遮り、話す事は何も無いと言わんばかりに拓哉は明久に背を向け

「一旦出直そう。バトルの方は明日教えてくれないか？」

「しゃーないな。ホントは二人にも早くバトルを楽しんで貰いたかったんだけど」

甚平の言葉に遥も無言で頷き、４人はその場を後にしようとするも明久は４人の前に周り込んで

「どうしてもその新型を返す気は無いと？」

あくまで自分のモノだと言う様な言い方をする明久に拓哉は溜息を吐いて

「くどいなあんたも。悪いがたとえ億の金を積んでもセフィを譲る気は無い」

「そうか……なら、仕方ないな」

そう言うと明久は指を鳴らした。かと思うと次の瞬間には黒服を来たＳＰがゲーセンの神姫関係のフロアを封鎖してしまった。流石のこれには周りの他のギャラリーもざわめく

「おいおい、幾ら何でやり過ぎだろ！？　こりゃ立派な強盗だぞ！」

恐らくこの後は黒服が拓哉から無理やりセフィを奪い取るものだと思い、甚平が思わず声を荒げるが、明久は甚平に呆れた様な目を向けて

「誰が無理矢理奪い取ると言った？　僕はただ彼にバトルを申し出たいだけさ」

「バトルを？」

「そうだ、僕も君も神姫マスター。ならば神姫バトルで決着を着けるのが筋ってものだろ？　君が勝ったら新型の事は諦める。ただし僕が勝った場合は大人しく返してもらうよ？」

明久は拓哉に指を突きつけ返事を待っていた。拓哉はセフィの方に少しだけ目を向け、やがて――

「……断る」

静かながらに、はっきりと明久の申し出を断った

「なっ！？」

その返答に驚きの声を上げたのは明久だけ。甚平は「まっ、当然の判断だな」と言えば、周りのギャラリーの中にも納得し頷いている奴が居る

「き、貴っ様。バトルを前に怖気づいて逃げると言うのか！？　それでも神姫マスターの端くれか！？」

「生憎こちらは、まだバトル未経験の初心者ですら無い素人だ。あんたの実力がどれぐらいのもんかは知らないが、そんなバトルはゴメンだ。それ以前に――」

今までは呆れ、無表情だった拓哉がここで怒りを露にした鋭い目つきで、そしてそこで我慢の限界だったのか遥もはっきしと険しい表情浮かべて拓哉の横に立ち

「そうやって、武装ならまだしも神姫そのもので平気で賭けバトルを持ち出す奴を、同じ神姫マスターだとは思いたくない」

「神姫はモノだけど……モノじゃない。私達の……大事な、家族」

二人の気迫に、明久は一瞬だけ気圧されるもすぐに優位に立つ者の顔に戻り

「だが、それならどうするつもりだい？　悪いけど、バトルを受けてくれるまでは君達を帰すつもりは無いよ？　勿論、周りの連中もね」

「おいっ！　他の連中は関係ねぇーだろ！」

「そうだね関係ないね。だから、みんなも早く帰りたかったら彼にバトルをして貰う様説得するんだ」

当然ながらこの様な事態にゲーセンのスタッフが気づかない筈が無い。が、相手は神姫バトルを支える権力者の息子。流石のスタッフも手を出せない、と言った所だ。が、明久はここで一つの勘違いをしていた。それは周りの人間は無関係と考えている事。彼らは拓哉達とは直接関係はなくても同じ神姫マスター仲間である。故に、早く帰りたいからなんて理由で拓哉に、ましてや今日始めて自分の神姫と出会えた彼にそのパートナーを賭けて戦わせるなど神姫マスターの端くれにも置けない様なマネをしよう等と思いもしない。その為、事態が膠着し始めた時だった

「あの～？」

今までずっと黙っていたロザリーが控え気味に手を挙げると

「そのバトルなんですけど～、拓哉君の代わりに私が出ちゃだめですか～？」

「ちょっ、ロザリーさん、何言ってんですか！？」

「だって～、このまま此処でこうしていても皆さん帰れませんし、だからと言ってバトル未経験の拓哉さんに戦わせる訳にもいきませんもの～。でしたらここはピンチヒッターで私が戦う方が手っ取り早いと思いまして～」

「お前がか？」

突然の立候補に明久が訝しげにロザリーを見つめているとやがてふと思い出す。目の前のこの女は今日の大会で自分と同じ様に決勝ブロックに出ていた女だ。白星の数じゃ劣ってしまったが直接の対決では自分は勝利している。確かに、テンペスタのマスターの方は全然自分の意見を変えようとしないし、周りの連中も逆に彼女に思いとどまらせる様に説得しており当てにならない。ならばこのままここで膠着しているよりは

「いいだろう、特別に許可してやる。早く準備したまえ」

そう言うと、明久は筐体の操作盤の前に移動しロザリーもその反対側に立つ

「ロザリーさん本気なんですか？もし負けでもしたら「大丈夫ですよ～」えっ？」

「こんな人なんかにはわたくしもルナリエちゃんも決して負けたり

しませんもの～。ねぇ、ルナリエちゃん？」

「うん！　ところで、ロザリー。今回は本気、出してもいいんだよね？」

「ええ、勿論～。本気の本気、全力で――」

そこで、ロザリーは口元には笑みを浮かべたまま目を鋭く細めると

「お仕置きして差し上げましょう～」

『な、なんだ！？　どうして……こんな』

バトルが始まってから暫く。明久はあまりの事態に声が震えていた。明久の戦闘スタイルは言わば弾幕。多弾頭ミサイルにガトリングやマシンガンと言った。数で勝負の武装で弾幕を張り、相手の動きを封じる。もしくは怯ませた所を本命のランチャーで仕留めるという物。実際、大会の時もロザリーはこの戦法で倒れた。なのに今は全然違う。他の奴なら防御するしかない弾幕をロザリーとルナリエはいとも簡単に避けている。弾の間をかいくぐり、ミサイルを左手に持ったアイネスの純正武装、長剣のロッターシュルテンと同じく純正武装のアーマーであるノインテーターの右副腕に持たせたジークムントの二刀流で斬りおとしている。業を煮やし、明久はＲＡ

（レールアクション）を起動。相手の後ろに回り込みすぐさまランチャーを放つも今度は左副腕に装備されたシールド、ヘルヴォルでガードされる

「弾幕と言ってもただめちゃくちゃに撃ってるだけじゃん。こんなんじゃ僕には傷一つ付けられないよ。それにしても君もかわいそうだよね、こんなマスターを持っちゃって、神姫はマスターを選べない。それが神姫の不幸な所だよね、でも、負けてあげる事はできないんだよ、ね！」

そう言って、ヘルヴォルの先端の刃で相手を突き刺し、刃を抜くと同時に蹴り飛ばす

『く、くっそ～～～！』

『ルナリエちゃん、遊んでいないでそろそろ決めないと、時間も遅くなっていますわ～」

「え～、久しぶりの純正フル装備なのにもう少し暴れたいよー」

『なっ！　あ、遊びだと！？』

こっちは本気で戦っていたと言うのにあっちはそれを遊びと言うのか？　その事にすっかり頭に血が昇った明久は神姫の静止も聞かずに、ガトリング専用のＲＡを使いガトリングを乱射するもそれもヘルヴォルにガードされる

『ルナリエちゃん～？』

「ちぇ、は～い」

やがて相手のガトリングが一旦弾切れを起こした所で、ルナリエは副腕に持たせていたジークムントを今度は自分の両手で持ち直して

「それじゃ、これで終わりにするよ！」

そう宣言し今度はルナリエがＲＡを発動、一旦右の方に移動したかと思うと、今度は一直線に相手に突っ込む。相手の方は機関銃で迎撃に入るがルナリエの前に弾丸を弾くバリアが展開している

『ショットガード、と言う事は大剣のＲＡか！』

相手の銃弾を無効化するバリアに一直線にこちらに突っ込んでくる動き、間違いなく大剣のＲＡによる強襲攻撃と判断し、剣を振り下ろす瞬間を狙い至近距離でミサイルを当てようと構える、が。それがいけなかった。突然、ノインテーターのスカート部分が二本の巨大なシザーに変形した

「いや違う！　あれは、まさか！？」

防具である筈の装甲武装の変形、そんな事が起るのは一つしかない。甚平が驚愕で目を見開くと同時に

「『僕達（私達）の本気、見せてあげる（ますわ！）！」

相手に肉薄する前にルナリエはシザーで相手の頭部を掴み、反対の方で相手を武装ごと次々に切り刻み、粉砕しながら尚も直進。やがて軽くジャンプし、相手を地面に叩きつける。そして今度は相手の両腕を掴んで横に広げさせた状態、まるで目に見えない十字架に貼り付けにされた格好で持ち上げ、ジークムントで突きの姿勢に入

る。各装甲のクリスタルアーマー部分に搭載された小型のコンデンサから大量のエネルギーが供給され、それがジークムントの刀身に集まり赤く輝く。そして――

「『シザース・ガレアス・ドミニオール！！』」

「『う、うわぁぁぁあぁ！』」

ルナリエが突きを放った瞬間、赤いエネルギーの奔流が相手を貫く。やがて奔流がおさまると同時に相手を放し、シザーは元のスカートアーマーに戻る。相手は既にピクリとも動かなかった

第6話『神姫マスターとして、彼女の本当の実力』（後書き）

シザース・ガレアス・ドミニオールはそんな技じゃねぇ！　っと思う方、多数かもしれませんがどうも原作のそれが少し地味っぽかったんでモーションを少し（と言うかかなり）弄らせてもらいました。今後もこう言うことはありますので＾＾；

第7話『甚平の神姫バトルマスターズ教室』

「そ、そんなバカな……」

「さて～、これでご満足いただけましたか～？」

ロザリーとルナリエの圧倒的勝利にギャラリーが静まり返っている中、彼女は普段どおりの口調で向かい側で操作盤に手を着き、がっくりとうな垂れている明久に声を掛けた

「それでは約束通り、潔くセフィちゃんの事は諦めて下さいね～。あっ、言っておきますけど～代理で私が戦うのを認めたのはそちらなのですから、今更こんなバトルは無効だ、なんてのは無しですよ～？」

「～～～っ！」

流石にそんな事は言えない、この状況でそんな事を言っても往生際が悪いだけだ。そんな事をしては自身の沽券に関る。自分にだって日本の上流階級としてのプライドがある

「この借りは忘れないぞ……」

故に忌々しげに拓哉を睨み付けながら引き下がる事しか出来なかった。やがて、明久たちが居なくなったのと同時に

「すっげーーー！！」

甚平が突然歓声を上げたそれに驚き、遥が一瞬ビクッとなる

「神姫の固有ＲＡを生で見たの始めてだぜ！　やべっ、ちょっと感動した」

それを肯定する様に他のギャラリーも口々に感想の述べたり、「どんな状況で習得したんですか？」等とロザリーに訊ねている者も居り、何の事やら判らない拓哉と遥は置いてけぼりを食らっていた。結局、この件で時間を食ってしまいゲーセンが閉店時間となった為、拓哉達の初バトルは明日にお預けとなってしまった

「さてと、それじゃ私はこの辺で失礼いたしますね～」

ゲーセンの外に出るとロザリーが軽くお辞儀をした

「あの、今日はスイマセンでした。それと、ありがとうございます」

「いえいえ～、わたくしはマスターとしてなっていないあの方にちょっとだけお仕置きして差し上げただけですわ～。もしあの時、拓哉さんがバトルを受けてたとしたらあの人と一緒に、めっ！　ってしましたもの～。そうですわ、三人の連絡先を教えて貰ってもいいでしょうか～？　二人の初バトルに、わたくしも立ち会いたいのでお願いします～」

「勿論ですよ。時間が決まったら後で連絡しますんで」

「では、改めて失礼いたしますね～」

無論、それを断る理由も無いので三人はロザリーと番号の交換を行い最後に甚平がそう言うとロザリーは最後に手を振りながら、その場を後にした

「さてと、そんじゃ改めて俺ん家に行くか」

「そうだな、今日は色々な事がありすぎてもうクタクタだ」

「……私も」

そして拓哉達も雑談をしながらゲーセンを後にした。ロザリーは暫く街灯のついた歩道を歩いていたが、やがて彼女の脇に一台の黒いリムジンが止まり、ドアの窓が下がるとそこには執事服に鼻の下に髭を生やした男性が顔を出し

「お嬢様、お迎えにあがりました」

「何時もありがとうございます～」

そう言って、車に乗り込むと男性は車を発車させる

「今日は何か良い事でもありましたかな？」

「判ります～？　実はとても良いマスター達に出会ったんですの。そうですわ、この事を“あの人”にも連絡しておきましょう」

ロザリーはバトルフォンを取り出してある人物に電話を掛けた。数回のコール音の後に

『もしもし、こんな時間にどうかしたの？』

電話の向こうから優しそうな男性の声が返ってくる

「こんばんわ～。今日はちょっとご報告がありまして～」

『もしかして、良さそうなマスターが見つかったのかい？」

「はい～、三人程。と言ってもその内二人は、今日マスターになったばかりなのでバトルの腕は未知数ですけど～」

そう言って、ロザリーは神姫祭りとゲーセンでの出来事を電話の相手に伝える。すると相手は「ふ～ん」と関心した様な声を出して

「億をの金を積まれても譲る気は無い。神姫は家族、か。良い言葉だね」

「ええ～とっても。おかげであの方達の為にわたくし、ダメと言われてましたけどちょっとだけ本気を出してしまいましたわ～」

『そうだね。もしその場に居たのが僕だとしても恐らく同じ事をしていたと思うよ』

「ですわよね～。それで、そのお二人の初バトルが明日行われるのですけど良かったらいかがですか？」

『判った。こっちも必要な備品や部屋の確保は終わってるから明日は僕も見に行くよ』

「はい～、でしたら時間が判りましたらメールいたしますわね～」

『うん、それじゃお休み」

「お休みなさいませ～」

「お話は終わりましたかな？　でしたら、オクテット」

「かしこまりましたわ。執事長」

そこで通話を終えてロザリーはバトルフォンを仕舞うと、それを見計らって執事は誰かに声を掛けた。すると自身の純正武装にして演奏道具でもある、ヴァイオリン用の弓の形をしたボウナイフのリジルとエレキヴァイオリンのグラニヴァリスを装備したヴァイオリン型神姫の紗羅檀（シャラタン）がロザリーの目の前にやって来て

「お嬢様、ＢＧＭに一曲いかがですか？」

「そうですね～。それではお願いいたします～」

「かしこまりました」

そう言って、恭しく一礼をするとヴァイオリンの演奏を始めた。機械の音では無い、生の音色。ロザリーとルナリエは目を閉じながらその演奏に耳を傾けていた

そして、次の日の朝。午後は神姫祭りのプロのバトルを見たいと言う事でバトル教室は午前中に行う事になった。そして拓哉達がロザリーの到着を待っていると

「すいませ～ん。お待たせしました～」

「いえ、大丈夫ですよ。俺達も今来たばかり……って、そちらの人は誰、ですか？」

そこに丁度ロザリーがやって来たのだが、隣に茶色のショートヘアーを自然な形で降ろしている。優しそうな瞳をした青年の姿があり、その肩には彼のパートナー神姫と思われる、アルトアイネスの姉妹機、アルトレーネの姿があった為、甚平が訊ねると

「こちらはわたくしのお友達の方なんですの～」

ロザリーが彼の方に目を向けると、彼は一歩前に出て

「初めまして、僕は夜月瀬斗（やづきらいと）。そしてこっちは僕のパートナーの――」

「あなた達がルナリエ達が言ってたマスター達ですね。私はアルトレーネのステラです、よろしくお願いします」

「ロザリーに誘われて来たんだけど、もし迷惑じゃなかったら僕も混ぜてもらってもいいかな？」

「勿論！　全然問題なですよ。なっ？」

甚平が拓哉達に話を振り、拓哉達も承諾の意を示すと瀬斗は笑みを浮かべて

「ありがとう、それじゃあ早速行こうか？」

瀬斗がそう言うと5人はゲーセンのドアを潜り、昨日の場所に向かう。流石に朝早くという事もありゲーセン自体に客は殆ど入っておらず、神機バトルのフロアに関しては祭りの真っ最中という事もありガラガラだった

「さてと、昨日は明久の邪魔が入っちまって出来なかったが、改めて、甚平&たま子プレゼンツ！　バトルマスターズ教室の開催だぜ！」

「開催だぜ、ですぅ」

「えっと……甚平さん、たま子さんよろしくお願いします！」

若干、テンションの高い甚平とたま子に拓哉達が苦笑する中、セフィだけがまじめに返事をして頭を下げる。そして甚平が筐体の傍にある縦長の装置の少し脇に立ち

「よし！　それじゃまずこの装置を見てくれ。これは神姫ターミナルスポットと呼ばれる装置で俺達は短くターミナルと呼んでるんだ。マスターの基本情報の閲覧や神姫ポイントの支給、武装の所持登録の他には対戦相手の検索を行ったりする装置だ。これから良く使う事になるから覚えておく様に。そして拓哉達が最初にやる事はこのターミナルでホームエリアの設定をする事だ。ホームエリアってのは神姫マスター達が主に何処のゲーセンでバトルをしているかを示す情報の事で神姫ポイントは主にホームエリアのターミナルから受け取る事になる。使い方は簡単、ターミナルの操作盤にＩＣカードかバトルフォンをセットするんだ」

「ここにバトルフォンかカードをセットするのですぅ」

甚平が説明を終えると、たま子がＩＣカードの差込口とバトルフォンをセットするくぼみの傍に立つ。拓哉が自分のバトルフォンをくぼみにセットすると、最初にホームエリアの設定を行う画面が開き、指示に従って操作を行うと登録が完了し次に神姫マスターとしての基本情報閲覧や所持登録を行うメニュー画面に移動した

「基本情報の閲覧や武装の所持登録に関してはこれをモバイル化したモノをバトルフォンから直接利用できるから余り使う機会はないかもな。ちなみにホームエリア以外のゲーセンでバトルをしても神姫ポイントは貰えるけど、ポイントの受け取り自体はホームエリアのターミナルでないと出来ないからそこんとこ要注意な？」

そして遥も同じ様に登録を済ませると、二人の基本情報にホームエリアとしてこのゲーセンの名前が表示された

「そんで、次は武装の所持登録。二人とも武装の取り説は持ってきてるよな？」

甚平の質問に二人はそれぞれケースに入っていた薄い冊子を取り出す。これはセフィとレイナの武装の取り説で中身は武器の性能などが書かれている。ちなみに武装自体は甚平の家に置いて来ており手元には無い。と、そこでただ見てるだけじゃ飽きたのか瀬斗とロザリーが二人の傍に来て

「神姫のバトルは主にリアルバトル、バーチャルバトル、そしてライドオンバトルの３つに別れるんだけど、後ろの二つはこの所持登録を行った武装しか使う事が出来ないんだ」

「逆を言えば～、リアルバトルを行わないなら、武装本体は持ってくる必要は無いんですのよ～」

「なるほど、一々武装を持ってくる必要が無い。荷物もかさ張らないし、無くす心配も無い、と言う事か」

「それに万一無くしたとしても、普通にその武装を使ってバトルをする事ができるんですね」

拓哉達が取り説を見て、セフィとレイナが関心している様に話していると甚平が説明を続ける

「それで、所持登録のやり方だけど取り説の中にその武装の製品番号が書かれてる筈だから、それを所持登録画面に入力すればいい」

「てことは、製品番号さえ判れば複数のマスターが所持登録を出来るって事になるのか？」

拓哉が疑問に思った事を訊ねると甚平は得意げに笑みを浮かべると

「それを訊いて来ると思ったぜ。この所持登録はネットワークを介して神姫協会本部と連動して行われるんだ。登録された製品番号は神姫協会のサーバーに全部保管されていて、重複した番号は登録出来ない様になっているんだぜ。つまり、相手の持ち主に武装の製品番号を教えてもらっても無意味って事だな。まぁ、他の奴が先に番号を確かめて購入した本人より先に登録しちまったら、その武装は他の奴の物って事になるから、新しい武装を買ったならその場でバトルフォンを使って登録する事をお勧めするよ」

「……番号、一つしかない？」

早速登録を行おうとしていたのか遥は取り説の中を確かめていた

が複数の武装に対し、番号が一つしかない事に疑問の声を上げるとステラとルナリエがそれに答えた

「それは、お二人のはＦＡパック（フルアームズ）と呼ばれる、純正武装がセットになって売られている品だからでしょう。その場合は一つの製品番号を登録するだけで全部の武装の登録が行う事ができるのです」

「ちなみにＦＡパックはそれなりに高いけど、個別で全純正武装をそろえるよりは断然お得だから二体目以降の神姫の武装を買う時に参考にするといいよ。ちなみに僕やステラの武装もＦＡパックで買って貰ったんだ」

二人の説明（ルナリエのは余り関係なさそうだが）を聞いて拓哉と遥は改めて所持登録を済ませ、所持武装一覧に自分達が貰った武装がカテゴリー毎に表示された

「これで、事前準備は全て完了だね。それじゃいよいよ実際にバトルと行こうか？　二人とも筐体の方に来て」

瀬斗が手招きで拓哉達の事を呼び、二人が筐体の方に移動。筐体を挟み向かい合う様に立つと拓哉の隣には瀬斗が遥の隣にはロザリーがそれぞれ立ち、甚平はその中間の位置に立つ。筐体はの天井と底の部分が長方形になった箱の様な形をしており中央に一部、正方形状に透明な部分があった

「筐体の操作もターミナルと同じでバトルフォンかＩＣカードをセットするんだ」

「次に、このステージと呼ばれる部分にバトルしてもらう神姫をセットするんですのよ～」

二人がそれぞれバトルフォンをセットすると目の前のタッチパネルに画面が表示され、更に操作盤中央の円形状の蓋が開き、そこからステージと呼ばれる部分がせり上がって来た。そしてセフィとレイナがそこに立つと今度は下に下がっていき、下がりきった所で蓋が閉じられる

「さて、そんじゃ次は武装のアセンブルだ。さっきも話したとおり、こうした筐体を使うバトルは所持登録を行った武装しか使えないからな。後、バトルフォンやターミナルで武装のエディットを予め記録しておけばそれを読み込む事で一発でアセンブルを完了させる事が出来るからお気に入りやよく使う組み合わせは登録しておいた方がいいぜ」

説明を受けながら二人は今回は一つ一つ防具の武装をセットしていった。やがて、武器の方を選ぶ段階に入り

「武器の方は六つまで装備できるのか」

「まぁ、一応はそうなんだけど」

そう言って瀬斗はセフィの武器の一覧を見ながら、Ｍ８ダブルセイバーとアルヴォＰＤＷ１１、ＧＥモデルＬＳ９レーザーソードをセットし

「まずはこの３つでバトルに慣れてからの方がいいかな」

「なんで３つなんですか？」

「現実でも物をたくさん持ちすぎたら重くて動きが遅くなるでしょ

？　それと同じ様に武器も装備数に応じて神姫の機動力にボーナス、もしくはペナルティを受けるんだ」

「３つを基準にそれより少なくしたらボーナスが、多くしたらペナルティをうけてしまうんですのよ～」

瀬斗の説明を引き継ぎ、ロザリーもレイナの武器一覧からジーラヴズルイフ、クルイーク、そしてグリーヴァをセットした

「最後にバトルフィールドの設定だけど、これは１Ｐ側のプレイヤーが行えるから最初に相談して決めておく必要がるね。今回は仕掛け無しの基本フィールド、『コロシアム』にしてみようか」

フィールドの設定も完了すると、次の瞬間、筐体の中央部分がせり上がり透明な六面体が現れ、その中に『コロシアム』のフィールドが映り、その中に武装を装備したセフィとレイナの姿もあった

「これで～、バトルの準備は完了ですわ～。ではお二人とも、このバイザーをつけてくださいな～」

二人は小型マイクの着いたバイザーを装着。瀬斗とロザリーもその場を離れ、甚平の横に移動し

「そして、最後にマイクに向かって「ライド・オン！」と言えば、いよいよバトルの開始だ！」

拓哉も遥も緊張しているらしく、拓哉は深呼吸をしてから、遥は胸の前で右手をギュッと握りながら

「ライド・オン！」

「……ライド・オン」

開戦の言葉を告げた――

第8話『開戦！　拓哉対遥』

『すっげー……』

ライドン・オンの言葉と同時に、バイザーに光が奔り、それが止む頃には視界が一変していた。目の前に広がる光景はさっきまで自分が外側から見ていたもの。けれど、いま自分はその中に居る。

「マスター」

『セフィか？』

「はい」

目の前の光景に感嘆の声を上げて見とれていたら、セフィが自分に話しかけてきた。自分のすぐ近く、と言うよりは自分自身からセフィの声が聞こえたそんな感覚だ。そして次に自分自身の姿に目を向ける。黒を基調とした機械の装甲に包まれたボディ、紛れも無くセフィのものだ。それを自分の身体を動かすのと同じ様に動かしている

「何だか、不思議な感じがします。自分自身の中にマスターが居る様な、そんな感覚」

『そうだな。そして、それは向こうも同じみたいだな』

自分から少し離れた場所。そこにはレイナの姿もあり自分と同じ気持ちらしく自分の両手を見つめている。その時、二人と二機の目の前に『ＲＥＤＹ』の文字が表示される

「遥、珍しいのは判るがそのぐらいにするんだ。そろそろ始まるぞ」

『……判った』

そして二人の手の中にデータの羅列が奔り、それがそれぞれの武器を形作る。レイナはハンドガンのジーラヴズルイフを、セフィはＧＥモデルＬＳ９レーザーソードをそれぞれ構える。緊張の一瞬、やがて目の前の文字が『ＧＯ！』に変わる。

『行くぞ！』

「はいっ！」

セフィはレーザーソードの光刃を斜めに下げた姿勢でレイナとの距離を詰める

「迎え撃つ、遥！」

『うん……！』

それを迎撃すべく、レイナはジーラウズルイフの引き金を引く。飛んでくる３発の銃弾をレーザーソードで弾き、クロスレンジでセフィはレーザーソードを振り上げる。それと同時にレイナは反対の手に巨大な太刀グリーヴァを持ちセフィの剣戟を受け止め、ジーラヴズルイフを仕舞い、グリーヴァーを両手で握る。二機はそのまま鍔迫り合いの状態になるが、それは長続きはせずレイナがリアパーツ、ＦＬＯ１７リアの副腕（サブアーム）に装備された、剣先とガトリングが搭載されたシールド、ロークの銃撃を放ち、セフィは銃撃をレーザーソードの腹で防ぎながらバックステップで距離を置く。

『参ったな。あのシールド、武器としても使えるのか』

「はい、それにあの二本の副腕も厄介です。相手はそれだけ多くの武装を同時に扱えますから」

そして、今度はこちらの番だとばかりにレイナはグリーヴァとロークの剣先を使った二刀流でセフィに仕掛ける

『けれど、二刀流ならこっちだって！』

そしてセフィの方もレーザーソードから、Ｍ８ダブルセイバーに持ち替え更にそれを二本の長剣、Ｍ８ライトセイバーに分離させ、こちらも二刀流で迎撃に入り、ぶつかり合う４本の剣が火花を散らす。そして、剣戟が納まりかけたところで、セフィは一旦を距離を置き、ハンドガン、アルヴォＰＤＷ１１で威嚇しつつ空へと飛ぶ

『相手はパワータイプ、ならこっちはスピードと三次元移動でかく乱。隙を突いてレーザーソードで、でかいのを一発叩き込む。いいな？』

「判りました。行きますっ！」

セフィはレーザーソードとアルヴォを装備した状態で空を飛び、銃撃で攻撃しつつ、相手のロークのガトリングとジーラヴズルイフの同時銃撃を避けつつ、隙を見て距離を詰めて斬りかかる

「くっ、流石に速い……」

レイナが苦々しく声を出す中、遥は銃撃で相手に近づけさせない

様にしながら頭を働かせた

『……レイナ』

「遥？」

『作戦……聞いて』

ロークの銃撃をセフィはダブルセイバーに戻したＭ８ダブルセイバーを目の前で縦に回転させながら防ぎ、その間に遥は自分の作戦を伝える

「判った。それで行こう」

『……うん』

するとレイナはグリーヴァで接近戦を仕掛ける。セフィは今度はそれを迎撃せず、再び空に舞い上がるとＭ８ダブルセイバーを仕舞い、レーザーソードを片手に持ち、アルヴォで威嚇射撃、相手がロークでそれを防ぐと同時にライトセイバーとレーザーソードの二刀流に切り替え、最高速でレイナに向かって急降下を始める

「遥っ！」

『……判ってる』

拓哉の作戦は何時か見たエウクランテクイーンでの真似事だ。急降下の勢いを乗せたレーザーソードの一撃で相手の防御を崩し、ライトセイバーでラッシュをかけ、最後にもう一度レーザーソードの本命の一撃を叩き込むと言うものだ。ストラーフがパワー型ならば

まず間違いなく受け止める、そう判断しての事だった。けれど――

『……今っ！』

拓哉の予想は見事に外れた。レイナは攻撃を受け止めず、それをあえて避けた。そして副腕でセフィの首を掴んで捉えると同時に、予め持ち替えておいた。パイルバンカー、クルイークをセフィに打ち込む

『ぐっ・・・！』

「きゃあっ！」

捕まっていては得意の高機動力も発揮できず、クルイークの一撃をモロに受けて吹き飛び、2、3回バウンドして床に伏す。レイナが追撃と副腕でグリーヴァを握るとそれを起き上がりかけているセフィに向かって振り下ろし、セフィもレーザーソードの刀身に手を添えた状態で受け止めるが、今度は反対側の副腕のパンチを受けてしまった

「今のはうまい判断だったね」

そして、二人のバトルを観戦していた瀬斗が思わず口に出した

「勢いの乗った大剣の一撃、それを受け止めるとしたらリアパーツの副腕を使うしか無い。恐らく拓哉はそれで副腕の動きが一瞬だけ封じられた瞬間、ライトセイバーで一撃当ててそこから連続攻撃に繋ぎ本命の一撃を放つ作戦だったんだろうけど、遥はそれを見越してあえて避ける事を選んだ。そうする事でフリーになった副腕で相手を捕らえた所にパイルバンカーの一撃を叩き込んだんだ」

「ですが、元々重機動型のストラーフであえて攻撃を避けるのは難しいですわよ～？」

幾ら後継機として多少はその欠点が補われていたとしてもそれでもストラーフ型が重機動型である事は変わりない。そんな状態で高機動戦闘をしていたセフィの攻撃を避けるのは難しい事だ

「例え、回避能力が低くても来ると分っている攻撃を避けるのは簡単ですから。いえ、恐らくは自分に近づかせない為の弾幕を止めて、あえて接近戦を仕掛けた事でそれを誘ったのかもしれませんね」

「ふ～ん、遥とレイナはそこまで見越してやったってこと？」

ロザリーの疑問に筐体の縁に立って観戦していたステラとルナリエがロザリーの方に目をやる

「たぶん、ね。判ってた上での事なのか、はたまた直感的にそうしたのかは分らないけれど、少なくても遥はそれだけのバトルセンスを持っている」

「と言う事はこの勝負はレイナの方の勝ちかな？」

二人ともこれが初陣。つまり互いに経験は0、ならば勝負を決するのは才能の差となる。けれど瀬斗はルナリエの問いに首を横に振りらね」

「それはまだ判らない。才能と言う点じゃ拓哉も負けてはいないか

「どう言う事ですの～？」

「拓哉とセフィのステータス画面を見てごらん」

そう言って、瀬斗はバトルフィールドの外に表示された空間状に表示されたディスプレイを指差す。そこにはマスターの名前と神姫、そして神姫の体力を表すＬＰバーとバトル中、神姫とマスターがどれだけ一体になっているかを示すシンクロ率の数値が表示されている。セフィはさっきパイルバンカーの強力な一撃を喰らった筈なのに、セフィのＬＰはあまり減っていない。派手に吹き飛ばされた様に見えてその実あまりダメージは受けていないという事だ

「でも、なんでだ？」

「まぁ～、そう言う事ですのね～」

そしてロザリーも何かに気づき、合点が言ったと言う様に声を出す。甚平だけが未だに判らずにいたが

「マスター、レイナとセフィのシンクロ率を比べてみるですぅ」

「二体のシンクロ率……？　あっ！！」

たま子に言われシンクロ率を見比べ、ようやく甚平も合点が言った

レイナと遥のシンクロ率が安定してる時は３０％前後で、攻撃を受けた時などの集中力の乱れによってぶれた時は２０％前半までに一気に下がる。駆け出しのマスターは最初は大体このぐらいの数値とブレ幅なのに対し、拓哉とセフィのシンクロ率は安定時に４５％、シンクロ率のぶれ幅も２，３％程度だ

「ライドオンバトルにおける神姫とマスターのシンクロ率は神姫の攻撃力や防御力と言った、戦闘力にそのまま直結する。だから言ったでしょ？　才能と言う点では拓哉も負けていないと」

遥が優れたバトルセンスを持っているのに対し、拓哉は神姫と高い次元で安定したシンクロをする事が出来る。最も拓哉の場合は剣道の稽古で培われた強靭な集中力も絡んでいるのだろう

「だからこの勝負。まだ結果は見えないよ」

そう言って、瀬斗は口元を吊り上げながら、視線をステータス画面からバトルに目を戻した

拓哉と遥が激闘を繰り広げている中、バトル筐体のフロアに一人の少女が近づいてきていた。意思の強い鋭い目に赤みかかった茶髪をポニーテールにしている。そしてその肩にはエウクランテが乗っている

「流石にこの時間帯じゃガラッガラねー。殆ど人が居ないわ」

「どうする千歳、素直にお昼にまた来る？」

「嫌よ、午後は神姫祭りでプロのバトルを見たいんだから。とりあえず、あそこに何人か居るからあいつらに相手してもらって……って、よく見たらあそこに居るの甚平じゃない」

「あれ？　確かにそうみたい」

千歳と呼ばれた少女が甚平気づくと小走りで甚平に駆け寄り、声を掛けた。そして甚平が彼女の存在に気づくと

「千歳？　お前、なんでこんな所に居るんだよ。神妃校の受験勉強をしてたんじゃなかったのか？」

突然、名前を呼ばれ振り返るとそこに居たのは小学時代の幼馴染3人組の最後の一人、小早川千歳だった。彼女は今、神妃校の一般受験を受けるべくバトルも我慢して家で猛烈勉強中の筈だったのだが

「毎日毎日勉強ばっかだったら飽きるっての、今日は一日気分転換よ。それより、あんたこそ何してんの？」

肩を竦めて甚平の疑問に答えると、千歳は腕を組んで甚平の隣に立つ

「新米マスター二人の初バトルを観戦って所だな」

「ふーん、いま戦ってる二人、ビギナーなんだ。なら私の相手にはならなさそうね……って！」

そして、今、繰り広げられているバトルに目を向けた。そして、今バトルをしている神姫が自分の見た事無い事に気づく。が、そこはすぐに新型か何かと予想できた為、特にノーリアクションだが二体のステータスを見た所で目を見開く

「いまバトルしてるの遥と拓哉じゃない！？　なんで拓哉が此処に居んの！？　なんで二人がマスターになってんの！？　ってか拓哉の初バトルでシンクロ率４５パーって何っ！？　と言うかこの二人はどちら様っ！！？」

「一度に聞くなっての！　後でちゃんと答えてやるから落ち着けー！」

矢継ぎ早に甚平に詰め寄り、彼の肩を揺さぶる千歳。甚平は千歳を軽く押して引き離し

「あ、あの～……」

「彼女、君達の知り合いなのかい？」

二人のやり取りが途切れかけた所でロザリーがおずおずと会話に入り、瀬斗がその続きを口にする

「ああ、スイマセン。えっと、こいつは俺と拓哉の小学校時代の幼馴染で――」

「小早川千歳よ。こっちは相棒のアーシア、ヨロシク」

「エウクランテのアーシアです。よろしくお願いしますね」

「おまっ！　年上に相手になんつー話し方してんだ！？」
「あらあら～、別に構いませんわよ～」
「年上の言っても年も一つしか違わないしね」
「だから～気にする必要なんてないんですのよ～」
「ほらっ、あっちもそう言ってるんだから問題ないって」
「お前が威張って言う事じゃないだろ……」
と、相変わらずな千歳の反応に甚平ががっくりと背中を落とした所でタイムアップによる試合終了のブザーがなる。少しの差でレイナが勝ちだ、二人はバイザーを外しステージからセフィとレイナも出てくる
「ゴメンなさいマスター、負けてしまいました……」
「初陣だし、気にしなくていいさ。それよりも今はバトルを楽しめたかどうかの方が大事さ」
「やったな、遥」
「うん……レイナも、お疲れ」
拓哉と遥がそれぞれのパートナーに労いの言葉をかけていると瀬斗とロザリーの二人が拍手を送り

「お二人とも、とてもいいバトルでしたわ～」
「そうだね、結果はともかく二人とも初めてにしては上出来さ」
「あら、もう終わっちゃったの？」
「あ、千歳……」
「えっ！　千歳！？」
セフィを肩に乗せた所で拓哉は千歳に気づき、声を上げると千歳も手を軽く挙げて
「久しぶりね拓哉、まさかこんな所であんたに会うなんてね。そして遥も、念願叶って遂に神姫デビューしたのね？　よかったなじゃない。その子達があんた達の神姫って訳ね」
「は、はい、セフィです。よろしくお願いします」
「レイナ。遥、知り合いなのか？」
「小早川千歳……中学の、同級生」
「なるほど」
バトルの後、筐体脇の長椅子に女子三人が腰を下ろして男子３人がその向かいに立つ。そして甚平が昨日の出来事を千歳に説明した
「なるほど、昨日そんな事があったのねー。にしても……」

そこで千歳は言葉を切ると、ニヤニヤ顔になり

「甚平がそんな事するなんてめっずらしいわね～。あんたの事だから「マジでっ！？　ラッキーーー！」とか言って、真っ先に食い付くもんだと思ったのに明日は隕石でも降るのかしら」

などと、まるで何処か聞いた様な台詞を言うと甚平はハァと溜息を吐いて

「お前も姉ちゃんも俺の事なんだと思ってんだよ……俺だって友情に厚い時ぐらいあるっての」

「と言っても、その後はしっかり奢らされたけどな」

「あ、やっぱり？　良かった、甚平はやっぱり甚平な訳ね。安心したわ」

「お前ら……」

拓哉達三人にとっては昔懐かしいやり取りに甚平を除く、４人と神姫達がそれぞれに笑い声を上げる。

「そんじゃ、早速もう一回バトルするわよ！　そうね、今度はタッグマッチにしましょ。　あたしと遥ＶＳ拓哉と甚平のコンビで」

そして千歳が勢いよく立ち上がると、拓哉のより濃い紫色をしたバトルフォンを二人に見せる

「おいおい、いきなりタッグマッチなんて難しすぎねぇか？」

「なに言ってるのよ。何事も経験よ、経験。拓哉と遥も勿論やるでしょ？」

拓哉と遥はそれぞれセフィとレイナの方に目をやり、二人も力強く自分のマスターに頷き返した。

「……やる」

「俺も賛成だ。兎に角、今は色んなバトルをしたい」

「決まりね。ホラ甚平、たま子、時間無いんだから、さっさと準備する！」

そう言って遥は操作盤が４つになってるタッグバトル用の筐体に移動し、いそいそと準備を始める

「やれやれ、しゃーねぇな」

「しゃーねぇな、ですぅ」

そして、残りの三人もそれに続き、やがて４人のタッグバトルが幕を開けた。その様子を瀬斗達は静かに見守り、瀬斗の顔には優しげな笑みが浮かんでおり、やがて何かを決めたかの様に頷いき、ステラはそんな瀬斗に声を掛けた

「マスター瀬斗」

「そうだね、彼ら４人に決定だ」

「拓哉さんに遥さん、甚平さんと千歳さん。ふふっ、これから楽し

くなりますわね～」

「ロザリー、楽しむだけじゃダメだってば。ちゃんと目的もあるんだから」

「わかってますわ～」

そうしたやり取りを交わし瀬斗達は再び、バトルを繰り広げる４人に目を向ける。が、その途中で

「それじゃ、僕はそろそろ行くよ」

「あら～、もうそんな時間でしたか？　これから最終試験ですのね～。がんばってくださいね～」

「ステラ姉、ファイトだよ」

「ありがとう、ルナリエ」

「うん、これをパスしたら――」

瀬斗は時計を確認した後、ステラを肩に乗せてどこかに行こうし、ロザリーは手を振り、ルナリエはステラにエールを送る

「僕もプロマスターの仲間入りだ」

第8話『開戦！　拓哉対遥』（後書き）

さて、今回の突っ込みどころはリリス何処行った！？　でしょうね。今作では原作の千歳ポジションには別のキャラを入れる予定なのと、ストラーフ型は既にレイナがいると言う事でエウクランテ型を千歳のパートナーにしました

第9話『終わる序曲（エンドオブオーバーチュア）』

それから、拓哉達は時間ギリギリまでバトルをした。５人だけでなく神姫祭りに行かずにゲーセンに来たマスターともバトルしたりした（主に拓哉と遥と千歳が）。後は神姫祭りでプロのバトルを観戦。それが終わる頃にロザリーは瀬斗の所に行くと言って別れ、４人は野乃香の所に戻ってきていた

「お疲れ様。どうだった、初めての神姫バトルの感想は？」

流石に昨日みたいにガラガラとは言わず、客はそこそこ入っている。故に野乃香も在庫チェック等の仕事をしながら拓哉達の話を聞いている

「……すごく楽しかった」

「同感です。ただのゲームなんかよりずっとハマリました」

「そう、気に入ってもらえて良かったわ。って、私が言うのも変な事ね」

ふふ、と可笑しそうに笑う野乃香。それから、４人は再び甚平の家に移動し、甚平の持ってた過去のＦバトルのＤＶＤを見たり、神姫も含めてジュースとお菓子で談話に花を咲かせていた。そうこうしている内に日も暮れ始めた所で

「さてと、そんじゃ私はそろそろ帰って勉強の続きしてくるわ。こうなったら私も何が何でも合格しないと私一人仲間はずれなんてゴメンだもの。それに――」

「それに、何だよ？」

甚平が千歳に先を促すと千歳はヤレヤレと肩を竦めながら

「この男共二人の世話を遥一人で出来るとは思えないしね」

「いや、どちらかと言うと……」

「千歳が俺らの中で一番のトラブルメーカーになってた様な……」

「なんか言った、そこの二人？」

「「イエ、ナンデモアリマセン……」」

千歳が二人を睨み付け、指をポキポキ鳴らして威嚇すると二人は同時に押し黙る。そして遥の方を向き直るとさっきとは違う優しい眼差しで

「じゃあ遥、私は帰るわね。あっ、そうだ。後でそこの男二人に私の連絡先教えといて頂戴」

「……うん」

「アーシア、そろそろ戻るわよ」

「判ったよ千歳。それじゃみんな、今度は神妃校で会いましょう」

「はい！」

「ああ」

「またなのですぅ」

そしてアーシアは千歳の肩に乗っかると手を大きく振り、千歳も最後に首だけをこちら向けて軽くウィンクをして甚平の家を後にした。そして、それから約１０分後ぐらいに

「そんじゃ、ボチボチ俺達も帰るか。セフィ、そろそろ行くぞ」

「うん……レイナ」

拓哉と遥も立ち上がり、それぞれの神姫に呼びかけるとセフィとレイナもたま子に軽く手を振ってそれぞれのマスターの肩に乗り、甚平の家を後にした。そして遥は拓哉を見送ると言うので駅まで一緒に来ていた

「それじゃ、俺もそろそろ帰るよ。本格的にこっちに移り住むのは３月になってからだな。まぁその間もこっちには遊びに来るけど恐らくそんなに頻度は多くないだろうな」

「……そう」

「そんな寂しそうな声をだすなって。高校始まれば同級生、嫌でも毎日の様に顔を合わす事になるさ」

「うん……」

「まぁ……その頃にはバトルの腕は離されてるかもしれないけどな」

「ふふっ」

そして二人して軽く笑い合い

「それじゃ、またな」

「また……セフィも」

「はい、遥さん、レイナさんもまた春に！」

「ああ」

その言葉を最後に拓哉とセフィは駅の中に入っていった

拓哉を見送り、レイナと二人っきりになった遥はその足でそのまま帰路につく。やがて家に着き、中に入る。案の定、玄関には靴は無く人間は自分しか居ない。そしてそのまま自室に戻り荷物を置く

「ここには、遥だけなのか？」

自室のパソコンにクレイドルを繋ぎ、そこにレイナを座らせて自分の机の椅子に座る

「うん……お母さん、遠くの病院で、働いてるから……。お父さんは……」

そこで遥の表情が暗く俯きがちになる。レイナが「言いたくないなら言わなくていい」と言おうとした所で遥は顔をゆっくりと上げて

「戦場カメラマンやってて……二年前に紛争で……」

「そうか……」

殆ど家に戻ってこない母親に既に他界した父親、故に遥は一年を通じて殆どの日を一人で暮らしている。拓哉みたいに自らそれを望んだわけでも無いのに、だ。けれど、この間の元旦やクリスマス、自分の誕生日と言った特別な日には決まって戻ってくるし風邪をひいた時も近所の人が看病してくれる様に計らってくれている為、決して母が自分の事を蔑ろにしていない事は判っている。それでも自分の中の寂しいという気持ちは決して無くならなかった

「でも……今日からは、レイナが一緒」

遥が神姫を求めていた理由はここある。自分の孤独を癒してくれる誰かの存在、それを遥は神姫に求めたのだ。人と同じ感情を持ち人と同じ様に生き、そして何時もマスターと一緒に居てくれる神姫に。けれど、母が生活の為に入れてくれるお金を神姫の購入の為に使うのは躊躇われた。故に遥は今まで神姫を買えずに居た。そんな時だった、新年を祝うあの日にレイナのマスターとなったのは。それはまだ1月だが遥にとって、今年一番の幸運だと確信していた

「遥……」

「だからきっと……」

今までの寂しい表情と違う、優しさに満ちた笑顔で遥は言う

「これからは楽しくなる……」

「ああ、そうだな」

はっきりと、確信を持って――

「全く、激動の二日間だったな……」

みんなと別れ、帰りの列車に乗り込んだ所でこの二日の疲れがドッと来たのか拓哉は座席の背もたれに背を預ける。ただ単に甚平とお祭りを見て回るだけのものだとばかり思っていたのに、たった二日だけだと言うのに拓哉にとっては今まで以上に密度の濃い、それで居て何処か充実した日々に感じられた。そしてその中でも特に衝撃だったのは――

「マスター、どうかしましたか？　わたしの事ジッと見つめたりして」

やはり、セフィとの出会いだろう。自分の中じゃ高校になってからバイトを始め、夏休み中には神姫を買うという予定だったのに、ひょんな事からセフィのマスターとなり、神姫バトルも体験した。やはりそれが拓哉の中では一番大きなウェイトを占めている。こっちの視線に気づいたのか、ジュースや弁当を置く為のミニテーブルの上で座っていたセフィがこちらを見上げ、訊ねてきた

「何でもないよ。ただ――」

「ただ、なんですか？」

たった二日だけでこれだけの事があった神妃市での生活。自分はこれからそんな場所で最低でも7年は過ごす。そう思うと

「退屈しないですみそうだな、って思ってな」

「そうですね、私も楽しみです。マスターとのこれからの生活」

俺にとってはそれだけじゃないんだがな、と思いながら拓哉はセフィに微笑みかけてから外の景色に目を移したのだった

粉雪が舞い散る冬の日、物語の序章は終わりを告げて役者達は一度、それぞれの場所へと散っていく。そして、始まりと出会いの象徴たる春。物語は本格的な幕開けを告げる――

第9話『終わる序曲（エンドオブオーバーチュア）』（後書き）

序章はこれにて終了です。本編に入る前に拓哉達４人のキャラの紹介を挟んで本編に入ります。年上二人組みの紹介はもうちょっと後の方で

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1195z/

武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

2011年12月25日02時51分発行